

Fate/Zero Gravity

色慾

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何番煎じか分からない、金ぴかザビ子による、第4次聖杯戦争。ロリはくのんに光源氏計画する慢心王が見たかっただけなんだ、すまぬ。ついでに子育てモードの王も見たくて、はくのんの人生をベリ―ハードにしちまったよ、すまぬ。月の聖杯の勝者になった後からストーリーが始まるので、金ぴかはデレマックスどころかむしろ突き抜けてヤンデレに近いかもしれない。騎士王にすら脇目も振らず、絶対白野至上主義を貫く王様をご覧ください。

※完走するまで、感想への個別返信は控えます。意図せず親父ギャグに…

目次

P r o l o g u e

第1話

1

S p h e r e

第2話

3

第3話

7

第4話

11

T r i a n g l e

第5話

15

第6話

18

第7話

22

第8話

26

第9話

29

D i a b l e

第10話

33

第11話

37

第12話

40

第13話

43

第14話

46

第15話

50

B l o o m

第16話

53

第17話

56

第18話

60

第19話

64

第24話	第23話	第22話	第21話	W i n g	第20話
84	80	76	72		68

Prologue

第1話

オリオン座近くの、何処かの量子ネットワーク世界。黄金の海に揺蕩う身体は、最早分解され切ろうとしていた。重力が限りなくゼロへと近づき、視界が霞んでいく。誰かが泣いている。

「何故だ、何故我^{おれ}を置いていく！目を開けろ、白野！貴様の旅はまだ始まったばかりだろう!!」

「楽し…った。ありが、とう…:■■■■■■■■■■」

私のような生命体ですらない、ある種の電子のバグのような存在。そんなちっぽけな存在が、月の裏側で、彼と出会い、共闘し、ここまです勝ち抜いてきた。そして、分解される運命をここまで免れて、生きることの喜びすら教えてもらったのは僥倖だった。幸せ過ぎるほどに幸せだった。だが、物事には全て終わりがある。私の体を構成するネットワークが起こした些細な不具合。私は、これ以上私として存在できない。

「謝るな！諦めるか!?岸波白野！貴様が許しても我は許さんぞ！疾く目を開けよ！目を開けよと言っている!!」

無言で、辛うじて動く指先で、頬に触れる。濡れている。こんなに泣くなんて、らしくもない。拭って気づいてしまった。きつとこの人の心に穴を開けてしまったのだろう。自惚れ抜きに、そう思った。だったらせめて。

「泣かな…いで、■■■■■■■■■■:わ:たしを見つけ…つと、またあ…え……」

「ああ、探すとも。幾星霜の果てまでも、我のマスターは貴様以外にあり得ぬ！」

保障はなかった。こんな嘘をついたのは、この人を悲しませたくない、ただの気休めだ。それでも私は願わずには、いられないー。

小さい頃から繰り返し見ているこの夢。いつもいつも、肝心要の彼の姿が、名前が思い出せない。あんなに素敵な王様、きつと天下に一人しかいないはずなのに、どうしてもそこだけは霧がかかって分からないのだ。

「白野ちゃん、ご本は後にして、ご飯食べましょう」

先生の優しい声がして、書棚に伸びかけた手が空く垂れ下がった。岸波白野には親がない。この教会が運営する孤児院で、シスター服の先生に世話になっている。少し精神が大人びているとはいえ、まだ5つ。小さな身体はあえなく捕獲されてしまった。

「本当に王様のお話が好きなのね。たまには別のご本も読むのが大事よ」

「うん、でも、はくのね、王様にいつか会いに行くの！約束したの！」
「そう。じゃあその約束を果たすためにも、しっかりご飯を食べて、大きくなりましょうね」

悠久の眠りから叩き起こされ、かの王は途轍もなく不機嫌だった。幾度となく繰り返される聖杯戦争などという血迷いごと、そのような些事のために王たる自分が呼び出されるなどと。

「王よ、どうか私に…」

臣下の礼を尽くそうとする魔術師の言葉などどうに聞いているなかった。震えるような歓びが胸を衝く。この時代には、あれがいる。まだ微弱だが、気配を感じるのだ。思わず笑みが零れる。この栄光にすがろうとする愚物どもはひれ伏したままだ。たった三画の契約の証。そんなもので誰を縛ろうとでも言うのか。

「貴様が我のマスターを自称する不届き者か？笑わせる。天上天下我のマスターたりうる人間は一人しかいまい。せいぜい他を当たれ、下郎」

いとも容易く契約を破棄し、打ちひしがれる男どもをよそに飛行船ヴァイマーナを取り出す。向かうはたった一人の、主人と認めた人間の元だ。

第2話

その日の月は、とてもとても明るかった。淡い金色の光を見ると、どうしても繰り返し見る夢を思い出す。少し悲しい気分になって、こっそりと教会の屋根に登る。本当はやっちゃいけないことだけど、こうやって月を眺めていると、心が落ち着くのだ。でも、なんだが今日は、そわそわして仕方がない。

首にかけていた鍵をそつと取り出す。5歳児の、掌に収まる程度の小さな金色の鍵、とは言えその機構は非常に精密で、常に幾何学模様の各パーツが予測不能な動きで分解される、遊動し、再組成されるため、一定の形を取ることがない。教会の前に捨てられたその日から、握りしめていたらしい。どこに使うものかは、全く見当が付かない。それでも、とてもとても大事なものだとは分かった。

目を閉じて、夢の世界を回想する。名前も顔も分からないけど、きつと迎えに来てくれると、そう信じていた。

「どうだ？綺礼」

「申し訳(ご)ざいませぬ、我が師。未だ令呪が顕現した新たなマスターは現れておりませぬ」

「そうか」

思わず、嘆息する。臣下の礼を尽くしたというのに、ギルガメツシユは此方をあっさり切り捨てた。予め此方の意図など見え透いていたのか？史料をかき集め、調べ尽くした太古の王の事だ。女神イシュタルとの因縁はあるものの、妻を娶ったという話は聞かない。だがマスターと呼んだその瞬間、かの王は愛情と我欲に塗れた男の顔をしていた。故に、ギルガメツシユがマスターと呼称する相手は、寧ろ彼にとって伴侶のような人物に違いないと推測した。ギルガメツ

シユがいかにも単独行動に優れていようと、持ってせいぜい後三日。その間に、是が非でもそれを得ようとする別のマスターを潰す必要があった。

「ただー」

弟子である言峰綺礼の声が思考を現実に取り戻す。どうやらずいぶん深く考え込んでしまっていたようだ。アサシンを召喚させ、諜報に徹してもらっている優秀な弟子が、珍しくいいよどんでいる。

「孤児院を経営する教会の外れで、王律鍵バヴールのようなものを持った女兒を、鍵屋が見ていたようです」

「本当なのか？」

「暗示をかけて鍵屋に描かせた鍵の形がこれです。見事な魔術機構となっており、常に不定形ながら、鍵の役割を果たし続けます。また、アサシンによると、魔術回路こそ少ないものの、魔力量は尋常ではなく、彼女が本当にマスターだった場合、優秀な動力源としても抑えられるかと」

綺礼が掻き集めた資料に目を通す。鍵屋の記憶を半ば無理やり抽出して再現したその鍵は、確かに複雑な魔術機構のように思える。まさに神代の神秘そのものだ。

「出るぞ、綺礼。確証がないとは言え、この娘を生かしてはおけん」

「はっ、我が師」

どうしてこうなっちゃったんだろう。先生、みんな、ごめんなさい。

大きな瞳にいつぱい涙を溜めながら、岸波白野は小さな身体で精一杯走り続けた。今では我が家となった孤児院が燃えている。先生達も、子供達も、皆不気味な髑髏の仮面を被った異形に殺されてしまった。血溜まりに足を取られながらも、ここまで生き延びられたのは理由があった。殺戮者達が白野に斬りかかる度、黄金の6枚の翼が自動展開され、白野を守ってくれるのだ。あの赤服の人は、アイギスだとか、イージスだとか言っていた。白野はそれがなんだか知らない。た

だ、怖くて鍵を無意識に握りしめると、必ずそれが攻撃を防いでくれていた。

外に逃げなきゃ！

しかし、自在に展開できる盾が万能ではないことは、白野も子供心ながらにわかってた。自分を殺そうとやってきた赤い服の大人は寶石のついた杖で、炎を操っていた。こうして階段の隅で気配を隠していたって、いずれはあの炎の蛇に飲まれるのだろう。それに相手は何人も大人だ。どうしたって、追いかえせはしない。

白野は人気のない小部屋にそっと忍び込み、震える手で服を脱ぎ捨てた。小部屋には偶然にも自分に似た背丈の子供が静かに息を引き取っていた。ごめんなさいと声に出さずに呟いて、白野は自分の服をその子に着せ、ベッドの下へ隠れた。大人達の気配が近づくにつれ、緊張が高まる。うまくいく保証はない。けれど、今はこれより良い手が思い当たらなかった。ベッドの下の隙間から、そっと様子を伺う。

「師よ、娘はもう事切れているようです」

「しかし妙だな、バヴールが見当たらない」

「引き続き調べましょうか？」

「ああ。それも連れて行きなさい。検分すれば何かわかるかもしれない」

扉が開き、そして再びしまった。男達の姿がすべて消えたのを確認して。白野はベッドの反対側から、そっと窓枠に足をかけた。幸い下は植え込みだ。大丈夫、きつと、アイギスが私を――

「お見事だ、お嬢さん。子どもらしい浅知恵だが、君のように賢い子は嫌いではない。我が元に下っていたら、さぞかし優秀な魔術師になれるだろう」

乾いた拍手が響き、やっと芽生えた希望の種さえ、無情に摘み取られる。意を決して飛び込んだ植え込みを取り囲むようにして、赤服と黒服の男達は待っていた。赤服の男が鷹揚に手を挙げ、いやに品の良い声で言い放つ。

「始末しなさい」

濁った暗い瞳の男は、こくりと頷き、片手に持った刃をこちらに向

ける。いやだ、死にたくない。お願い。誰か。だれかー！。

第3話

豊かな栗毛の髪が宙を舞い、岸波白野は、若干5歳にして、自らの足が寸断され、背中から突き刺さった短刀が臓物を掻き出すのを目の当たりにした。それでも、大切な鍵を握りしめたまま。なんとか先へ進もうと這いずる。

「諦めなさい。その体では持つて10分。鍵を渡せば、せめて安らかに逝けるように配慮する」

ひゅーひゅーと不恰好な呼吸音が口から漏れ、白野は血と泥で汚れた手を宙へ伸ばした。何かを掴みとろうとして、何もできなかった。もうここで死んでしまうの？また、会えないの？嫌だ。嫌だ。だって、お別れも言えなかつたのに。

ー来て！ギルガメツシュ！！

「そんな…ばかな……」

眩い光が天地を照らし、裸身のまま重傷を受けた少女の胸に、赤い印がはつきりと刻まれた。そして、その身を受け取り、しかと腕に抱いた原初の王、ギルガメツシュもまた、時臣に召喚された時とは違い、髪を下ろし、上半身の甲冑をとった姿ー即ちかつて無二の友、エルキドウと争った際の神話礼装をまとった姿で顕現した。蛇のような赤い目に激情を湛え、ギルガメツシュは静かに手を上げた。バビロニアの宝庫に蓄えた全ての原典が、殺意を持って一斉投擲され、幾千万の星の雨となって二人の男に降り注いだ。

失態だ、これはあるまじき失態だ。これであの少女は此度の聖杯戦争で最も強力なサーヴァントを手に入れ、その上こちらは完全にアレを敵に回してしまった。幸い、万が一のために使い魔に写し身載せていたので、命拾いをしたが、これで生存率は大幅に下がってしまった。アサシン数体をわざと寸断させ、既に亡き者にされたように工作したのは良い策だったが、それがもし成功していなかったとしたらと

考える、本当にゾツとする。

「綺礼、ステータスは、あの時、ギルガメツシユのステータスは見えたか？」

「はい、なんとか。師よ。あの娘は化け物です。あの娘の姿を見るや、ギルガメツシユのステータスが全てA＋以上に跳ね上がっております」

「……それは、本当かい？」

長い沈黙の後、やっとの事で時臣はそう絞り出した。愛弟子の綺礼は、青い顔のまま是といった。ソファに沈み込み、遠坂時臣は目を閉じた。遠くへ残してきた妻子の笑顔が浮かぶ。しかしそれを再び目の当たりにすることはないだろう。この時点で、遠坂家の聖杯への道は途絶えたのだから。

岸波白野は冬木市で最も豪華な最上階のスイートルームの中、一人意識と無意識の間に漂っていた。無残に切断された足にも、裂かれた腹にも不器用に包帯が巻かれており、今や呼吸もやや安定している。命に別状を来す傷はギルガメツシユが宝物庫に持っていた霊薬を湯水のように使ったおかげでなんとか治ったが、意識の方はそうもいかなかった。人形のように動かぬ少女を、ギルガメツシユは一人じつと見守り続けた。

「早く目を覚まさんか、雑種」

そう言つて、愛しそうに豊かな栗毛に指を通す。懐かしい感触に、胸が締め付けられるような思いがした。王は柄にもなく感傷に浸り、後悔の沼に沈んでいた。コレがこの時代にいると知り、即刻仮初めのマスターとの縁を切ったことに後悔はない。だが、こやつが今は血と肉を持ったただの人であることを失念していた。月の裏のデータであれば、バックアップから容易に回復させることが出来るが、生身の人間というのは余りにも脆弱過ぎた。何より、令呪が顕現していなかったとはいえ、彼奴らに先を越されたのが最大の失策だった。

「ぎる…がめしゆ…う…」

「安心するが良い。我はもうどこにも行かん」

うわ言のような呟きが聞こえて、まだ幼い額に口付けを落とす。まだ幼い少女の横に長身を横たえると、黄金の男は久しく見えなかった愛しき財を、そつと腕の中へ引き寄せた。

あくる朝、岸波白野は濃密なまつげで縁取られた琥珀の瞳をぱちくりとさせながら、己の置かれた状況に当惑していた。逞しい男の人の腕で抱きとめられている。腕の主は、眩い金髪と、まるで彫像のように整った顔立ちをしていた。優しいけど、少し近寄りがたい雰囲気をしている。人より高いところで、孤独を抱えているような人だなと思つた。

「……おうさま…」

二、三度の瞬きの後、重い金色の睫毛が持ち上がり、神秘的な赤い虹彩が姿を現した。キュツと結ばれた口元が笑みに歪んで、男は尊大に言い放つた。

「ようやく起きたか、雑種。待ちわびたぞ？だがよい。貴様の耳触りのよい声色に免じ、特に許す。我のことは名で呼ぶがよい」

「なまえ…ギルガメッシュユ？」

「そうだ。その通りだ。良いぞ。記憶はまだ戻らんようだが、それでも我を求め、我の名前を呼ぶのが実にお前らしい」

目の前の男の話はまだ岸波白野には少し難しかったが、頭を撫でる大きな掌の暖かさに、今までにない幸福を感じた。ふと、体を起こした拍子に疼いた傷に、昨日の惨劇が脳裏に蘇る。自分でも、言葉を発する唇が震えるのを感じた。

「みんなは、どうなったの？」

「お前以外は皆死に絶えた」

現実を拒絶したい心と、現実を受け入れろと言う頭がせめぎ合う。先ほどの幸福感からどん底に突き落とされる。一人のうのうと生き延びたことへの罪悪感に雁字搦めにされ、つま先からすつと体温が消えていく。ごめんなさい。ごめんなさい。生きていて、ごめんなさい。

い。

「え？」

眩きが漏れたのは、ギルガメツシユに濡れた頬を叩かれたと気付いた後だった。頬を挟まれ、剣のように鋭い双眸と対峙する。とてつもなく怖くて、心を切り裂かれるような思いがした。

「我を見ろ。痴れ者が。貴様は確かに奪われた。なればやるべきことは何だ？ここであきらめるか？愚か者め。お前の目の前にあるのはお前だけの剣だ。何をすべきか、わからないとは言わせまい？」

張り裂けそうな胸から、浄化されていくような感覚。ギルガメツシユは私というちっぽけな人間に愛情を注いでくれる。それが嘘偽りのないまっすぐな感情だからこそ、私を甘やかさず、現実を突き付けてくるのだ。その言葉は、自分でも驚くほど、すつと口から滑り落ちた。

「私は、進む。前を向いて、ギルガメツシユと一緒に進む。振り返ったり、諦めたりなんかしない」

「ハッ、それでこそ我が雑種、我が財よ。お前は真に我が愛でるに足りる魂の持ち主だ」

少女のまだ幼い琥珀に強い意志が灯される。闇に、弱さに足元を掬われてはいけない。死なせてしまった者たちみんなを背負って、一度も振り返ることなく、前に進もう。

第4話

あの後、ギルガメツシュが聖杯戦争の話を教えてくれた。私がなぜ追われて、何に巻き込まれているか、そして、なぜみんなが殺されなくてはならなかったのか。そして、私を殺そうとした大人たちも、私も、魔術師であるということ。聖杯、すべてを叶える願望器。答えは幼心ながら分かりきっていたが、それでも私はギルガメツシュに訊かずにはいられなかった。

「聖杯を手に入れたら、みんな、戻ってくるかな？」

「戯けたことを。答えが分かっているながら、なぜ問う？」

琥珀の瞳が伏せられ、豊かな栗毛がはらりと頬にかかる。ギルガメツシュの言う通りだ。人は死んだら戻ってこない。今更後悔しても、過去を変えられやしない。伏せたままの顔に、ギルガメツシュの指が触れる。

「ほう。分かっているようとも、私の口から裁定を下されたかったとみる。つくづく愛いものよな。だが忘れるな。人は滅びればただの腐った血と肉の塊になり果てるだけだ。仮にお前の願いを叶えるものがあつたとすれば、それは摂理に逆らった、外道の極みであろうよ」

ギルガメツシュの言葉は時々私には難しい。けれど、ギルガメツシュがそう言うなら、きつとそう言うことなのだろう。

「ギルガメツシュは？聖杯への願いはないの？」

「ないな。聖杯の一つや二つ、とうに倉に納めてあるゆえ、今更欲しくもない。だが、まがい物とはいえ至宝の端くれ。人に遣るには勿体ないものよ」

「なんだか、ギルガメツシュらしいね」

「そうであろう？」

ギルガメツシュは何だかご機嫌だ。ご機嫌なときはいつも優しく頭を撫でてくれる。戦いの最中とは言え、二人で放浪するわけにも行かないので、ギルガメツシュはこのスイートルームを拠点にすることとしたようだ。

同時刻。御三家の一つである、アインツベルンの姫君もまた、彼女を護る騎士とともに、日本の地に降り立った。絶世の美女と男装の麗人という組み合わせは、目立ちすぎるほど目立っていたが、当の本人たちは無自覚である。

「アイリスフィール、私から離れないように」

「分かっているわ、セイバー。でもいいじゃない。だって、聖杯戦争は夜でしょう？時間はたっぷりあるわ」

「それはそうですが……」

先ほどから冬木の一等地にあるブティックで、はしやぎながらショッピングをするアイリスフィールを、セイバーがやんわりと窘める。困ったように笑って、アイリスフィールが少し寂し気な視線をセイバーに向ける。

「少しはしやぎ過ぎたかしら？今まで城の中にいたから、何もかも新鮮で」

「いいえ。アイリスフィール、貴女の言うとおりだ。少しは楽しむ余裕も必要だろう」

「ありがとう、セイバー」

談笑していると、小さな影がセイバーにぶつかった。5歳くらいの子供だろうか、聡明そうな琥珀の瞳をしており、顔立ちも整っている。子供は、ぶつかった勢いで尻餅をついたようだ。手を貸して立ち上げさせる。

「すまない。迷子か？」

「はい。ぎる……お兄ちゃんとはぐれちゃって」

高価そうなワンピースの裾をポンポンとはたいてから、岸波白野は少し緊張しながら答えた。何しろ凛々しい金髪碧眼の美少女と、天使のような風貌をしたアルビノの美人に囲まれたのだ。思わずモジモジしてスカートの裾をきゅっと握りしめる。

「一人で頑張ったのね。貴女のお名前は？」

「岸波白野。お兄ちゃんは、えっと…背が高くて、金色の髪をしてい

て、赤い目をした、王様みたいな人です！」

勢いよく言ってみたものの、あまりよく伝わっていないようで、目の前の二人は「王様……」と呟いて顔を見合わせた。

「とにかく、相手も探しているだろうし、動き回るのは得策ではないわ。ここで待つべきかしら？」

「アイリスフィール。この国のデパートには迷子センターなるものがあると聞きます。そこに連れて行くのが得策かと……」

「あつ」

何やら大事になりそうだったので、止めようとした途端、ふわりと体が宙に浮いた。

「それには及ばん、雑種共。我が財に礼を尽くした事、感謝しよう」

相変わらず尊大な口調で、ギルガメツシュが2人に謝意を伝えた。

岸波白野の服を買うため、今は品の良いオーダースーツに身を包んだ彼は、今度こそ離さまいと、岸波白野を抱え直した。

「ぎ……お兄ちゃん、自分で歩けるよ」

「フツ、手を離して迷子になったのは誰だ？」

「うう……」

そんなやり取りをしている間も、アイリスフィールは破顔していたが、金髪の女性は彼女を庇うように半歩前に進み、あの男は危険だと念話で伝えていた。この王気、間違いなく人のものではない。

「ほう。ホムンクルスと騎士のサーヴァントとな。魔術師のおもちやがここで何をしている？」

「まじゆつし……お姉さんたち、魔術師なの？」

そんな考えを見透かしたかのように、赤い蛇のような目を細め、金色の男が皮肉げに嗤う。岸波白野は驚きながらも、ギルガメツシュにキュツとしがみついた。

「クツ、貴様サーヴァントか？アイリスフィール、私から離れるな」

「やめておけ。流石の我もここで構えるつもりはない。まあ、どうしてもというのであれば、ここで串刺しにするのも、吝かではないかな」

ギルガメツシュの挑発に、セイバーが見えざる剣を構えようと魔力

を練り上げる。しかし、両者の睨み合いは、幼い声によって、あっさり止められた。

「ダメだよ、ぎる。ここでしたら、関係ない人に迷惑だよ」

「その通りですね。セイバー、剣を納めて」

「アイリスフィール!?…分かりました」

「今日はありがとう。またね、お姉さん」

そう言っって手を振る栗毛の少女を抱えたまま、金髪の男は去って行った。

Triangle

第5話

夜が来る。

黄金とエメラルドで構成された絢爛たる飛行船^{ヴァイマーナ}。そのただ一つ用意された玉座の上に、岸波白野とギルガメツシュは居た。正確には、玉座に腰を掛けたギルガメツシュの膝の上に、岸波白野が抱かれているだけなのだが。オーブンカー式といえればそれまでだが、夜風がさらさらと髪を撫でて心地よい。

「ギルガメツシュ、あそこ！」

少女が指さす先のコンテナでは、すでに青の騎士と二槍の兵が刃を交わしていた。昼にデパートで迷子になった自分と一緒にいてくれたセイバーとアイリスフィール。相対するは最速のクラスを持つサーヴァント、ランサーだ。ランサーのマスターは見えない。技量は互角か、それともセイバーが優勢か。だが、生身の人間一人をかばい立っているセイバーの方が、今は劣勢に見えた。

「フツ、既に始めたか。どうする、白野？加勢するか？それとも、息の根を止めるか？」

「止める。どちらも傷つけさせない」

「ほう。それがお前の願いか。なるほど欲深なものだ。だがそれは、少し遅かったようだぞ？」

ギルガメツシュの手がポンと頭に置かれた。視線の先をたどると、戦の鬨^{とぎ}を上げた大男が、雷^{いかずち}の轍を残して、チャリオットを駆けて行った。あれは、ライダーだ。マスターである少年を後部に乗せている。「追って、ギルガメツシュ」

「良からう」

夜の闇を切り裂くようにして、黄金の飛行船は静かに加速した。

「アツララララララララララララーイ!!王の御前である!双方、刃を納めよ!!」

戦車を曳いた牡牛を空中に留め、半ば挑発するように言い放った。新たに表れた敵にセイバーは警戒を深め、ランサーは戦いに水を差されたせい、涼し気な一瞥を遣っただけであった。双方の顔を見て、岩壁のような胸を張って、ライダーは更に声高に宣言した。

「我が名はイスカンドル!此度の戦ではライダーのクラスをもって現界した!うぬらと矛を交わす前に問うておきたいことがある!うぬらが聖杯に何を求めるかはわからぬ、だが今一度考えてみよ。その願望、天地を喰らう大望に比してもなお、まだ重いものであるのかどうか!!」

豪放に笑う男に対し、呆れるもの、驚くものと反応はそれぞれだ。なぜならば、聖杯戦争において真名の秘匿は不可欠。それを自ら晒すとは、よほどの馬鹿者か、あるいは相当な実力者か。ヴィマーナを近くのビルの屋上に停止させ、岸谷白野は双眼鏡で一部始終を見守っていた。ギルガメッシュは不満そうにしているが、当初の目的である、「争いを止める」という点ではライダーが代わりに遂行してくれたので、もう少し静観しておこうと思ったのだ。

「とどのつまりなあ。ひとつ我が軍門に降り、聖杯を余に譲る気はないか? さすれば余は貴様らを朋友として遇し、世界を征する愉悦を共に分かち合う所存でおる!!」

「なっー!?!」

あまりに不遜な物言いに、その場にいた各々が、口をあんどりと開けて驚愕した。さすがにこれははつきり断っておかないと、背後の王様がもつと不機嫌になってしまいうだろう。近くにもう一つなんらかの力を感じるのが気になったが、岸谷白野はこのタイミングで介入することとした。というよりも、白野とてギルガメッシュを差し押さえて王を称する人がいることに、腹を立てずには居られなかったのだ。

結果――

「我を差し置いて王を称するとはな?よほど不埒の輩と見えた」

「難癖つけられたところだな。イスカンドルたる余は、世に知れ渡る

征服王故な。貴様こそ王を称したいなら、名乗りを上げたらどうだ？」

肌を刺すような威圧感を遠慮なくまき散らし、岸波白野を腕に抱いたまま、原初の王が戦場へ降り立つ。その重圧に誰もが大地に縫い付けられたように動くことができな。唯一征服王を称したイスカンドルだけは、悠然とギルガメッシュに答えた。それを鼻で笑い、更に反論しようとするより先に、気づけば白野は叫んでいた。

「勝手なことを言わないで！王様はただ一人だもん！」

「フツハハハハハハハハ！あれが言っているのは、そういう事ではないが、まあ良い。天上天下に王たるものは我一人だ。間違いではない。そら、膨れるな。お前は飴でもなめて見ている」

なんだかとてもなく馬鹿にされたような気がして、咄嗟に出た一言だというのに、当の本人に窘められては形無しだ。素直に飴を受け取り、口に放り込む。ほんのりとした甘みに、ざわついた心が少しだけ落ち着きを取り戻した。

「随分と威勢が良い嬢ちゃんだ。なんだあ？聖杯戦争にはお遊戯をする子供までいるのか？」

「今なんと言った？雑種ごときが。我が主を侮辱したからには、生きては返すまい」

そう言つて、ギルガメッシュが片手を上げると、その背後の空間に金色の波紋が波打ち、ありとあらゆる武器の原典が、姿を現した。重火力を持った一斉投擲の構えだ。その時、岸波白野の心が大きく鼓動し、何かが頭の中で警鐘を鳴らした。孤兒院での出来事の直前に感じたのと同じ胸騒ぎに、思わず首からかけた王律鍵バザルイールを握りしめた。

第6話

「待って。何かくる！」

現れたのは、漆黒の影を身にまとったフルプレート・アーマーの騎士だった。何かの影響で、ステータスすら見えない。これはギルガメッシュと相性が悪い。どうしてそう思ったかはわからないが、白野の本能はそう告げていた。マスターの姿はない。正面で当たるしかないのか？

「誰の許しを得て俺を見る？ 狗。せめて狂犬らしく、散り際にて俺を興じさせよ」

「ダメーアイギス!!」

止めるよりも早く、ギルガメッシュが宝具の一角を黒い男に一斉掃射した。咄嗟にアイギスを展開する。生身の人間が展開できる盾の威力などたかが知れていたが、白野は必死だった。何かに力を吸い取られるような感覚と、寸でのところでそらされた槍が髪を一房攫って行く感覚。怖い。死が差し迫り、思わず涙が滲む。

「その薄汚れた手で我が財を害するか、狗!!」

「閉じて！ 王律鍵!!」

思わず真名で呼びかけ、強制的にギルガメッシュが準備していた兵装の第二陣を消す。追撃をしようとする黒騎士をひらりと躲し、金色の王は再び飛行船に降り立つ。

「どういうつもりだ、白野。」

「投げるのはダメッ！ 全部あいつに掴み取られちゃう。近くで戦わなくちゃ、負ける！」

「フツ……慢心を捨てろと言うか。特別だ。今宵のみは貴様と同じ地に立とうぞ、狂犬」

そう言つて、ギルガメッシュは雷の形を模した細身の剣を二振り下げ、セイバーを次の標的に見据えた狂戦士へ駆けだした。神話の再現ともいふべき戦いに目を瞠り、チャリオットの後部座席で少年は、ただ目を凝らすしかなかった。

「おい坊主。お前、マスターだろ。あの黒いのは一体どうなってやが

る?」

「それが、見えないんだ。全部靄がかかっている。あいつ…バーサーカーだよ」

「ほう、バーサーカーか。理性を失っているにしては、えらく芸達者なやつよな」

「えっ!?!」

「なあんだ。お前気づいてなかったのか。アイツはな、あの金ぴかが飛ばした剣を掴んで、続いて飛んできた槍を払ったんだ。おそらく掴み取ったものを宝具にする力だ。一筋縄では行かなくて、ありや。いや、それよりも見どころがあるのは、むしろあの娘の方だが…」

「あの時の『掴み取られる』…まさかあの娘!?!」

「ああ。完全に読み切っていたんだらうよ。でなきや二回も金ぴかの攻勢を止めたりはしない。加えて投げずに近づいて戦えとまで指示していた。まだ粗削りだが、ただ子供にしちゃ、随分と良い目をしてやがる」

ライダーに言われて、再びウェイバー・ベルベツト…先の少年は、金と黒の英雄の戦いに目を戻した。剣技は明らかにバーサーカーが上だったが、まるでその動きを読み切ったようにギルガメッシュは難なく攻撃をかわす。岸波白野もまた、王律鍵を握りしめ、額に汗を浮かべながら、二人の戦いを見守っていた。

「天の鎖!!」

幼い声に呼応するように、天より伸びる鎖が戦士を拘束する。黄金の王の猛追に、一瞬だけ晒した隙を、白野は見逃さなかった。追い打ちとばかりに双剣の切っ先がバーサーカーの胸へと吸い込まれる。だがその瞬間、岸波白野は再び強い予感に、背後を振り返った。

「ギル…あれ!」

バーサーカーに背を向け、ギルガメッシュは躊躇いなく飛行船へ舞い戻った。跳躍の間につなぎ合わされた双剣は、今や一張りの優美な大弓へと姿を変えていた。白野をかばうようにして弦を引き絞り、光の矢を撃つ。轟音が響き、破魔の槍にて奇襲をかけたようにしたランサーの体が吹き飛ぶ。

「見たか？綺礼。あの娘、やはりあの場でさっさと始末しておくべきだった」

「ええ、我が師。この短期間でここまでの技量を身につけるなど、あれは正常ではない」

聖堂教会の地下深く、ワインを片手に遠坂時臣は言峰綺礼とともに、サーヴァントの監視に遣ったアサシンの視界から、一部始終を見ていた。

「正直英雄王一人だけだったら、まだ望みはあった。だが今はそうも行かない。あの娘——ギルガメッシュ縁の人間とは言え、聖杯戦争に慣れ過ぎている。しかも、あそこまで完璧にあの傲慢な王を御しているとは。あれは、我々にとって脅威だ」

「いかがいたしますか？師よ」

「引き続き監視を。まだこの段階では、我々が生存していることを、知られてはいけない」

「どういう事だ、ランサー。お前にはセイバーを倒せと命じたはずだが？」

「申し訳ございません、主」

ケイネス・エルメロイ・アーチボルトは丁寧に撫でつけた金髪を乱し、額に青筋を浮かべながら、忌々し気に歯ぎしりをした。ケイネスは事実聖杯戦争に何も求めていなかった。参加理由はただ一つ、家名に箔をつけることだけ。ところがこの様はなんだ。そもその間違いは、どこぞの不届きものに聖遺物を盗まれたところからだった。かのマケドニアの王は寄りにもよって歯牙にもかけなかった劣等生の教え子に渡り、こちらと言えば急きよ呼び出した次善のサーヴァントと戦うことを余儀なくされた。とは言え、ランサーという三騎士の一

角でありながら、使い勝手の良いクラスだ。ところがこれは愚直のあまり時期を見て主に勝利を捧ぐことも知らぬでくの坊だ。いくらセイバーのクラスを頂いていようと、あのような小柄な女一人縊り殺せないとは。加えてソラウまでが……。いや、やめておこう。我が魔術工房は完璧だ。一先ずここに籠れば、積極的に出撃せずとも、そう易々と打倒されることはあるまい。

「ソラウ、外してくれ。ランサーと少し話したいことがある」

「あら、つれないわね。私がデイルムツトの魔力源だと言うのに？」

「すまない、ソラウ。これは君を守るためでもあるんだ」

第7話

「ディルムット・オディナ。お前はかのフィオナ騎士団の一番槍とも謳われた男だ。先の戦いの失態は一先ず良しとしよう。あの娘について、どう思う？あれには一体何が見えていた？」

「我が主。あの娘はまだ幼いですが侮れません。本日狩り損ねた弓兵に指示を出していた時の瞳は、まるで知者ファアガス・フィンヴェルや、千里眼にして我が朋友のディアリン・マクドバのようでありました。早いうちに摘み取らねば、必ずや我々にとって災いとなる花を咲かせましょう」

「……ほう。貴様、あの小娘が私より優れた魔術師だとも言うつもりか？」

「滅相もない！」

己の失言を恥じ、麗しい容貌をした槍兵は頭を垂れた。興味をなくしたように頬杖を突き、掌に集約した月 ヴォールメン・ハイドグラム 霊 髓 液を弄んだ。

「お前のいう事も分からなくはない、ランサー。お前から取り出した戦いの記憶は繰り返し見た。ここで腑に落ちない点が二つある。一つ、あのサーヴァントは何者か？あれほど多くの宝具を所持した男は、神話上ただ一人しかあり得ん。二つ、私の推察通りだとして、なぜあの娘が宝具を使えた？バーサーカーの攻勢を防いだ神話の盾を展開したのは、間違いなくあの娘の方だ。

アーチャーとて阿呆ではない。あれが容易に縊り殺せる器だったら、みすみす戦場まで連れては来ないだろう。あの娘の魔術回路を解析する限り、魔力量こそ多いものの、属性も回路の数も凡庸そのもので見どころがない。私の仮定が正しいとすれば、あの娘があそこまで力を発揮できるには、サーヴァントの能力スキルのせいか、それともサーヴァントから何らかの強力な礼装を預けられているかだ」

「おお……」

ディルムット・オディナは顔を伏せたまま瞠目した。今生こそ騎士の誓いを貫こうと仕えた主は、これほど天才的な頭脳の持ち主であったか。主君の慧眼をもつてすれば、誰も敵にはならないだろう。

「実を言うと、礼装の正体には既に心当たりがある。我々は未だ工房に穴熊を決め込むとして：ランサー。お前はあの娘に張り付き、隙を見てあれの持つ鍵を強奪して来い。あれは聖杯戦争抜きにしても貴重なものだ。学術的にも興味がある」

「はっ」

ヴィマーナから降り立ち、拠点のスイートルームへ戻った頃には、ゆうに零時を超えていた。岸波白野は疲労と眠気でふらふらとベッドへ向かうが、途中で子猫を捕まえるように、英雄王の腕に抱きとめられてしまった。

「これ、寝台に上がる前に風呂に入れ」

「だって…ギルガメツシユ、も…：眠いよう…」

「やれやれ。特別だぞ、雑種。王たる我に側使いの真似をさせようなど、本当に厚顔なマスターだ」

ブツブツと言いながらも、嬉しそうに風呂を沸かし、ギルガメツシユは岸波白野を抱えて風呂場へ向かった。腕の中の少女は魔力消費が激しいのか、うとうとしながら何とか意識を繋ぎ止めている様子だった。腰まである長い髪を洗い、たつぷりと香油を刷り込み、小さな体にも泡立てた石鹸をつける。

「…：ギルガメツシユ？」

「いや、何でもない」

幼い体の中心に刻まれた令呪に、言いようのない幸福を感じ、思わず手を止めてしまった。泡のついた手で目を擦ろうとする白野を止め、抱き寄せたまま泡を流してやる。ジャグジー付きの豪華な風呂に沈む頃には、岸波白野はは完全に安心しきった様子で眠りに落ちていた。

「ええい、起きんか白野。逆上しても知らんぞ？」

「ん…ぎる…：がめ…しゅ」

思わず叱咤するも、寝言で愛しそうに名前を呼ばれてはそれも叶わ

ない。結局黄金の王は頃合いを見計らって少女を風呂から引き上げたのだった。

翌日、岸波白野はギルガメツシュとルームサービスのモーニングティーを楽しみながら、窓際のテーブルを囲っていた。サイドテーブルのサンドイッチを摘みながら、白黒の盤面に向かう。チェスである。しかし、普通のチェスではない。各々の駒が持ち主が定義した性質を表すというシロモノで、今は聖杯戦争の人達を模していた。余談だが、持ち主が与える条件さえ揃えば、盤面自体も今実際にいるフィールドを示せるという戦局俯瞰用のものだ。

「どう見る、白野？」

戦闘指示については、身体が覚えていたため、何となくギルガメツシュに出すことができたが、戦略自体を5歳児に練ると言うのは無茶だと思ったが、ギルガメツシュはその部分についても、全力で鍛える気らしい。パステルピンクのワンピースのまま、お行儀悪く椅子の上に膝立ちになって、岸波白野は唸っていた。

「どこから手を付ければ良いか分からないか？まずは分かっていることから良い。情報は多いに越したことはない。お前が覚えている限りを盤面に並べて、取捨選択するが良い」

「分かった。まずセイバーはここ。アイリスフィールを庇っていたから、多分マスター」

チェス盤の中央にクイーンとキングを並べると、それぞれが男装の麗人と、白髪の美女の胸像へと変わった。ついで、その横にナイトを並べる。

「これはランサー。マスターは見えなかった。そしてライダーとマスター。乱入してきた人。ライダーは強いけど、マスターは慣れた人じゃない。あと、バーサーカー。ギルガメツシュの剣を掴んだ人」

「良い。では次に各々について分かっていることをまとめよ」

「セイバーは強いけどランサーに押し負けそうになっていた。アイリスフィールを庇っているから、かな？ランサーはバーサーカーとギルガメツシュが戦ってた時、私を狙ってきた。ライダーは何を考えてい

るのか分からない。バーサーカーは怖い。ギルガメッシュの剣を握めるから。でもセイバーを見て変な風になつてた」

「上々だ。ならば自ずと何をすべきか見えてこよう」

「キヤスターを探し出す。こつそり何かさされたらやだもん」

た少女のために、各種取り寄せた新聞を読み聞かせた。情報収集は大
事だと教えた記憶はあるが、まさか月の裏側でもこの世でも、ここま
で読み物に執着心を魅せるとは思わなかった。

「あ、そうだ。これっ」

「全く。飽きぬやつよ」

きらきらと琥珀の瞳を輝かせながら、メタルフレームの眼鏡を渡さ
れる。何故かこれを掛けると、白野はまるでまたたびに酔った猫のよ
うに、涎を垂らさんばかりの勢いで大はしやぎするのだ。可愛い雑種
の心を引き付けるのは良いが、毎朝これでは、さすがに飽きるとい
うもの。

「魔術師による神秘は秘匿される。新聞を読んでも仕方あるまい」

「そうだけど…」

「まあ良い。そこまで言うなら読んでやらんでもない」

5, 6社分の一面を朗読し終えたところで、白野はギルガメツシュ
を止めた。どうしても気になることができたのだった。

「ギルガメツシュ、過去一週間分の新聞、まだ取つてあるよね？」

「お前が捨てるなど言うのでな。ほれ、あそこに積みあがっておろう」
「ちよつと待って」

そう言つて、白野はパタパタとベッドの横に積まれた大手新聞社の
紙面から、過去一週間分の紙面を持つてきた。それをサイドテーブル
に並べて、ギルガメツシュに見せる。

「ほら、やつぱり多すぎるよ」

「死人の数か？どの時代に置いても狂人は居るものだ。別に不思議で
もあるまい？」

歯牙にもかけない様子でギルガメツシュは言う。答えはすでに得
ているのだが、これを機に白野に考えさせるのも一興だ。あくまで気
づいていないように装つて、白野を促す。

「ううん。日付を見て。ギルガメツシュが迎えに来てくれた日がこれ
で……これより前は、多くて2, 3人同じ家の大人と子供を殺してい
た。けど、この後からは住む場所がばらばらの子供ばかり死んでい
る。一人でやるには難しいと思う」

「ならば共犯者を偶然得ただけであろう。何の証明にもならん。人数の着眼点は良いが、決定的なものを見逃しているな」

「ついていった数が多いんじゃないやなくて、一気に死んでいるのが変？」

「それだけではないが、及第点だ。お前の言う通り、この前後で一回当たりで殺された人の数は、一人の人間が処理しきれぬ数を優に上回るようになった。仮に数人いたとしても、ここまで汚らしくまき散らすには、相当な時間と労力が必要なのは、いうに能うまい？」

「けどまだ捕まっていない。魔術を使ったから？」

「それが、サーヴァントに命じたか。古来より秘術は贄と血と切り離せぬもの。お前はお前の魔力を持って我を維持しているが、凡百の魔術師の誰もが自力でできると言うわけではなからうな」

「人を殺して……餌にしている」

鷹揚に頷いて、ギルガメッシュは押し黙った。孤児院での一件が頭を過ぎり、思わず床にへたり込む。震えが止まらない。だってあの時死にかけてのだ。きつといつか乗り越えて、前を向いて歩こうって思ったばかりなのに。そんなことをする人がまだいたなんて――

「やれやれ、手のかかる雑種だ」

ひよいと体が持ち上げられ、ギルガメッシュの腕に戻される。

「穴熊を決め込むか？もともとよりマスターであるお前が態々前線に立つことはあるまい？」

からかう様な声色に、握りしめた拳に力が籠る。

「……行く！私も。私だって、ギルガメッシュの隣に立って、最後まで見届けたい」

「フッククククククク……ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！裁定者たる我と並び立つか？そこまで堂々と欲するとは、さすがに想定外だ。だが面白い。我が裁定を観測する役割は、誠お前にだけは相応しかろう」

「お願い、ギルガメッシュ。こいつだけは、許せない」

第9話

ヴォールメン・ハイドラグラム

月 靈 髓 液を身にまとったまま、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトは単身聖堂協会地下へと足を運んでいた。机を囲む男たちの前に、今朝がた受け取った封書を投げ出す。

「このような場所に呼び出してどう言うつもりかね？悪いが御三家とは言え、呼び出したサーヴァントに早々に見切りをつけられた脱落者になど、構っている暇などないのだよ」

己への絶対的な自信から来る挑発に、遠坂時臣はしかしながら乗ることはなかった。此度の聖杯戦争の目的は、根源への到達。家名のために、あるいは自らの欲望のために戦う者に比べ、彼は抜きんでて魔術師らしく、そして合理的だった。

「ロード・エルメロイ。そうは言っても、呼び出しに応じたからには、君だって興味はあるはずだ。違ukai?」

「フンッ、聖杯戦争の参加者以前に、私も学者の端くれだからな。しかし、お前たちがあの場に立ち会ったという証拠がどこにある?」

「やれやれ、疑り深いものだ。綺礼」

「はい、我が師よ」

時臣の弟子、言峰綺礼はフラスコを差し出した。ヴォールメン・ハイドラグラム 月 靈 髓 液で

それを受け取り、害のないものであることを慎重に確かめる。内容物に水銀を介して接続すると、彼らがギルガメッシュのマスターと接触したと主張した記憶が、直接脳裏に流れ込んだ。

「あの場に出していた使い魔と、アサシンが持ち帰った記憶だ。あの娘だけであればいくらでも捏造できようが、この「生きた王鍵」には見覚えがあるだろうか?」

「なるほどこれは確かに誤魔化しの効かないものだ。だが、この情報を晒して貴様に何の得がある?すでに敗退しているのであれば、大人しくここで保護されて居れば良い」

「確かに私は戦いを降りた。だが、君が想定した通り、あの男は原初の王ギルガメッシュだ。神霊にも匹敵する英霊があそこまで執着する子供に、正直興味がある。それと、ここでまだ生きていることが露見

すれば、早晚あれに殺されるだろう。自分たちの命のためにも、
イレギュラー不安要因は早々に取り去りたいものでね」

「フツ、大方あわよくば聖杯戦争に復帰したい気だろう」

「残念ながら令呪もない今ではそれも難しい。君も学者なら私の気持ちがよく分かるだろう？これは単純な好奇心だ。何より、君は一つ損せずにあの娘の情報と、アサシンの偵察能力を手に入れることができる。率直に言って、7人のマスターのうち、僕が最も警戒するのは天才である君のことだ。同盟を組んではくれないか？」

「断る。その程度の情報、ランサーであつても調べ上げることができ
ることだ。態々貴様に手を貸すまでもない」

意を決したように、時臣は目をつぶった。そして手ずから一枚の羊
皮紙を差し出す。

セルフ・ギアス・スクロール「自己強制証明だ?!」

「ソラウ・ヌアザレ・ソフィアリ。君の婚約者らしいな。確かに天才たる君をここで殺すのも、君の魔術工房を突破するのも、容易ではない。何よりそうしてしまつては惜しい。だが、暗殺に特化したアサシンに女一人殺させるのは大したことではない」

「……それは、脅しかね？」

「いいや。泣き所を突かれるリスクを一つ低減させたまでだ。同意すれば、私も、私の弟子も君の婚約者を害せない。その上、この先の聖杯戦争を有利に進める手助けまでするんだ。悪い条件ではないだろう？」

「よろしい。その契約、しかと受け止めた」

抜け目のない男だ。だがここで断る理由もない。ケイネスはそう判断し、薄汚い暗殺者どもの手を取ることにした。所詮は三騎士すら呼び出せなかった小物。役に立たなければ切り捨てればよい。

「主よ。宜しかったのですか？あれはいずれ裏切る者です」

「構わん。我が工房は完璧だ。ソラウに関しては、別途礼装でも持たせばよからう。アサシンの諜報能力を使えるのは大きい。「鍵」さえ

複製できれば、あの娘どもなど恐るるに足らない。ランサー、引き続き岸波白野に張り付き、アサシンの動向も合わせて監視しろ。鍵の強奪は第二次だ。あれだけの映像があれば、現段階でも複製と解析は可能からな」

「ご無体な！この顔をお忘れになったのですか!?!」

アイリスフィールを背後に庇い、訳のわからないことを喚き散らす奇面の大男を睨み据える。アイリスフィールが知り合いかと問うてくるが、冗談ではない。あんな奇怪な顔をした狂人は一人たりとも思いつかない。気配からしてサーヴァント、消去法で考えればキャスターに違いないが、左手が使えない今、魔力に対する抵抗のある相手を万全に屠れるとは言えなかった。

「我ら英霊すべての祈りをそれ以上愚弄するというのはなら、次は手加減抜きで斬る！さあ、立て!!」

だが、蒙昧にも自らが聖杯に選ばれたと称する姿は我慢ならなかった。武装をし、見えざる聖剣の一撃をすれすれのところへ叩き込む。この道に刻まれた深い亀裂を見て、意味の分からない阿呆は居ないだろう。だが、その脅しも、目の前の狂人には無意味だったらしい。

「そこまで心を閉ざしておいでか、ジャンヌ。それなりの荒療治が必要とあれば、次は相応の準備を整えてまいりますよう」

「避けて、セイバー!」

突如、子供の声が響き、黄金の王が顕現する。とっさにアイリスフィールを横抱きにして飛び退くと、先ほどキャスターが立っていた場所の後方に何か挟れた跡ができ、金色の矢が刺さっていた。

「……チツ、逃がしたか」

「仕方ないよ。着いた頃には、多分もう消えていたもん」

「何事か、アーチャーのマスター?」

「ええつとね、話すと長いんだけど……」

白野がこれまでのいきさつを伝えようと口を開いたのと、聖堂教会がマスター招集の告知を出したのは、奇しくもほぼ同刻であった。

冬木市郊外の深い森の奥に、アインツベルンが保有する城はあった。貴族どころか、どこかの王族の離宮のようなそれに居心地の悪さを感じながら、岸波白野は緊張した面持ちで場内へと入った。傍らに立つギルガメツシユは慣れたもので、ウルクにある自らの城と比べたらまだみすぼらしいのなんの言っているが、白野と言えば完全に場の空気に呑まれていた。

キヤスターとの邂逅後、マスターたちは教会へと招集された。冬木の一連の異様な連続殺人、その首魁がキヤスター陣営であること、また、これが最早教会だけでは秘匿できないことを告げられ、過去の聖杯戦争で余った令呪を褒賞に、聖杯戦争の一時中断およびキヤスター討伐の依頼は為された。殆どのマスターは使い魔が代理で教会へ出席したが、岸波白野とアイリスフィールだけは、直接その場から教会へ赴いたため、此度の監督者と直接対面するに至った。そしてその帰り、セイバーらの有無を言わさぬ気迫を押され、半ば拉致するように城へ招かれたのであった。

「どういう事だアイリ。なぜアーチャーとそのマスターを連れてきた？」

衛宮切嗣は愛する妻、アイリスフィールの型破りな行動に、やや苛立っていた。アーチャーのマスターはまだ魔術師未満の子供だ。だが、だからこそ大人が思いもつかない方法で裏をかかれる可能性がある。幾つもの戦場を渡り歩き、少年兵相手に苦い思いをした己にとっては、ある意味最も拠点へ近づかせたくない相手だ。

「それはアイリスフィールのせいではありません、切嗣」

「君か、セイバー」

「ええ。この二名はキヤスターについて何か知っているように見えた。だから尋問のために連れてきたまでだ」

気難しい主と漸く目を合わせて討議する機会に恵まれたことに喜ぶつつも、高潔な騎士の王は勇んで主に己の意見を告げた。

「だったらボロボロになるまで傷つけて、猿ぐつわに縄でもかけて連れてくるべきだろう。五体満足の敵を、そのまま自陣に招き入れるなんて、正気の沙汰ではない」

「あ、貴方は私がアーチャーよりも弱いというのか!」

自分たちを差し置いて言い争いを始めてしまったセイバー陣営に、岸波白野は淹れられた紅茶を前に、ただでさえガチガチになった体を震わせていた。戦闘時ならばいざ知らず、基本的に子供である彼女は大人同士の怒鳴り合いには慣れていない。横の椅子に座っている己のサーヴァントはと言うと、狼狽した様子の自分を見てクツクツと笑いをこらえている。だが、背に腹は代えられない。頼れる相手は、この場でギルガメッシュだけだ。白野はこつそりと王の袖を引っ張り、涙をこらえながらその耳に唇を寄せた。

「あのね、ギルガメッシュ…」

「緊張で厠を借りたいだ!ハハハハハハハハハハハハ!!さすが我が雑種は愉快千万だな。おい、アインツベルン…ククツ…:…言いたいことは後だ、うちのハサンを厠へ案内してやってくれ」

「な、何でばらすの!」

「ハア。アイリ、連れて行ってやってくれるか」

涙を大きな瞳に溜めたまま、あつさりとは乙女の沽券に関わることをばらされた岸波白野は、茹蛸状態で顔を覆った。隣の王様は相変わらず腹を抱えて大爆笑だ。ハサンの意味は分からなかったが、とにかく凄く馬鹿にされたことだけは分かった。ギルガメッシュは時々、デリカシーがない。切嗣はと言うと、完全に毒気を抜かれたのか、あきれ顔でドアを引いた。

「着いていかなくて良いのか」

煙草を吹かせながら、切嗣が問う。今ギルガメッシュとそのマスターは引き離されている。始末するには、絶好の機会だ。だと言うのに、目の前の男は全く慌てた素振りを見せない。なんとも不気味な限りだ。

「戯言たわごとを。大方配下の女に狙撃でもさせているのだろうか？だが無駄だ。我に殺す気があれば、貴様らすでに死んでいるぞ」

「チツ…戻れ、舞弥」

目の前の男は狙撃手を女だと断じた。大よそこちらの手の内などばれている様なものだ。衛宮切嗣は、二本目の煙草に火を付けながら、相棒に帰還を命じた。面倒なやつと関わり合いを持ってしまったものだ。セイバーは先ほどより言葉を発さず、後ろに控えている。

「そろそろ話してもらおうか。君たちの知見とやらを」

「あ……」

「どうした白野。ここはお前が主役だ。存分に語ってやるがよい」

少し緊張は解れたものの、未だに委縮したままの白野に対し、王はいつになく容赦ない。死んだ魚のような目をした男は、どう見ても危険な人だったが。きつと話すまでは返してもらえないだろうと、そんな予感がした。

「キャスターが近頃の殺人者だと気付いたのは、三日前くらい。死んだ人が多すぎるから、ギルガメッシュに調べて貰ったの。最初は、サーヴァントの餌にしているかと思っていた。でも、多分、違う」

未だに容易に想起される惨劇を思い浮かべながら、ギルガメッシュの手をぎゅつと握りしめた。

「あれは、きつとおもちやにするために、殺しているんだ。じゃなきゃ、あんなあべこべに体を繋ぎ合わせたり、無理やり生かしたりはしない。だから、キャスターは誰かに見せる為に、殺しているんだと思う」

「確かにどうせ死肉になる餌を生かしておくのは無駄なコストと言える。だが、僕達にはそれを正だと判断する術はない。話にならない」

バツサリと切り捨てる切嗣に、思わず言葉に詰まる。助けを求めようようにギルガメッシュを見ると、いつも通り余裕たっぷり頭に撫でてくれた。

「あまり虐めてくれるな。白野の話が正鵠を射ていることは、貴様のサーヴァントが一番分かっております。先の遭遇で何を言われたか、思い出してみろ」

「確かに、奴は神への怒りとともに、私のことを『ジャンヌ』と呼んでいた。それから、私があつた男を思い出さないのは、神のせいだとも。だからと言って一体なんだ？ 奴の正体が何であろうと…」

「違うよ、セイバー。そういう事じゃない。キャスターはセイバーがジャンヌで、キャスターのことを思い出せないのは神様のせいだと言っていた。私はキャスターが何を考えているかはわからない。でも、キャスターが怒りをぶつける先は神様だ。今まで子供を変な風に殺して、そうしてきた。でもその怒りはちつとも神様にも、セイバーにも響かなかった」

「まさか…」

「きつと、キャスターはもつと殺すし、それを、セイバーに何度も見せに来るんだと思う」

第11話

「なっ……」

清廉なる騎士の王は絶句する。よもや自分のためにさらに犠牲者が増えるなどと。

「ならば迎え撃つまでだ。あの様な畜生を野放しにはしておけん！」

「そこまでだセイバー。たかが令呪一画のために無駄なことをする気はない」

「ですがっ」

濁った湖底のような瞳をしたまま、衛宮切嗣は気だるげに煙草の煙を燻らせた。最終的な目的は聖杯だ。打算ではなく、一時の正義感に駆られてキャスターを討伐するより、懐がガラ空きになったマスターを狩った方が効率がいい。

「フツ、如何にも矮小な雑種が考えそうなことだ。帰るぞ、白野」
「……………そうだね。今日はありがとう」

小さく呟いて、椅子から降りる。差し出されたギルガメツシユの手は、とても暖かいものだった。セイバーは悔しそうに俯き、血が滲まんばかりに拳を握り締めている。アイリスフィールも、とても悲しそうにしている。少しでも気を晴らして貰いたくて、思わず扉の前で振り返る。

「またね、セイバー、アイリスフィール。また来ても、いい？」

「ええ、また」

少しだけ驚いた顔をして、セイバーが笑った。

「ねえ、ギルガメツシユ。夜更かししてもいい？」

飛行船ヴィマーナの上で、膝を抱える。背後のギルガメツシユは、頬杖をついて目を閉じている。冷たい夜風が、この時ばかりは頬を裂くナイフのよう感じられた。緩やかに瞼を開け、ギルガメツシユが視線をこちらへ向ける。ギルガメツシユの瞳は宝石のように綺麗で、時々こうして

磨かれた剣のように鋭い。

「好きにするが良い。だが、我は唯一の王にして、裁定するものだ。我と並び立ち、我の力を欲し、我の主と称するならば、これから何を見聞きしようとも、忘れることは許さん。お前には、それらすべてを最期まで見届ける義務がある。それでも尚、前に進む覚悟はあるか？」

目を閉じ、ギルガメツシュに救われた日を回想する。何度も斃された。けれど、逃げてはいけない。何を背負っても、最後まで進まなくちゃいけない。それがただ一つ、岸波白野にできることなら。深呼吸をついて、真つすぐギルガメツシュに視線を合わせる。

「私は引き返さない。力を貸して、ギルガメツシュ」

「良い。それでこそ、我はお前の剣となろう」

下水を穴倉にしていることは分かっていた。ダムを周辺を起点として、暗くて湿った地下へと潜り込む。徐々に闇になれても、視界は明晰にならない。この手を引く黄金の王だけが唯一の導きだ。腹を決めたのに、ふとした瞬間に竦みそうになる足を叱咤しながら、何とか先に進む。

見えない壁を掻い潜ると、途端にこの地下空間に悪臭と怨嗟が満ちる。ギルガメツシュは終始無言だった。ふと、手が離され、外界から守るように肩を抱かれる。黄金の波紋が揺らぎ、取り出した小さなラントンが掲げられる。足元から照らされたのは、やはり地獄だった。嘗て人であった個が、群れを為すのではなく、一つのモノとして千切れ、溶け合う。頭を挿げ替えられ、腸をずりりと引き出され、弦を為し、健を為す。おそらくオルガンを模したものだろうが、死臭漂うそれは醜悪の一言に尽きる。何よりも残酷なことは、それがまだ生きていると言うことだ。喉を枯らし、血を流しながら、無限の苦しみにもがき、唸り呻く。微かに蠢動する手足は、生への執着か

それとも、死への渴望か。

「あ……あ……」

言葉が出なかった。現実はいったって想像よりはるか残酷なのだ。折角約束したのに、なぜこうも心は容易く折れようとするのか。ギル

がメツシユは笑うでもなく、怒るでもなく、変わらぬ眼差しを持って目の前の巨大なオブジェを見据える。頬を濡らす滴に、視界が歪み瓦解する。だが、生と死どちらが幸福かを判じ、裁定するのは白野のすべきことではない。彼女にできることは見据えること、見届けることだけだ。頬を拭う大きな手に擦り寄る。

「私は忘れない。ここで生きていた人たち、死んでいく人たちを。ギルガメツシユ」

「良いだろう。末期の炎を灯すのは、我々の役目に他ならない」

宝物庫から黄金の弓が取り出される。以前目の当たりにしたものよりは一回り小さいが、より眩い光を放っていた。ギルガメツシユが矢をつがえると、弓矢それ自身が炎となって燃え盛り、流星のように宙を裂いた。聞くに堪えない断末魔を発する、人の成れの果てを介して灯された炎の道は、広大な地下空間を、昼のように照らした。

「行こう」

そう呟いて、ギルガメツシユの手を取った。ランタンの光も頼りにしつつ、一步踏み出す。きつとこの先ずっとこんな事に慣れることはない。平気になるなんてことはあり得ない。けど、どんなに心が傷ついても、キャスターを見つけ出して、滅ぼさなければならぬ。

「王に無駄足をさせる雑種など、後にも先にもお前一人だな」

「ごめんなさい。キャスター、工房を捨てたのかな？」

「心に傷をつけ、足掻いた拳句に骨折り損だった訳だ。よもや、悔いているのではあるまい？」

「反省はしているよ。キャスター達が他の人たちのように拠点にいるはずだと決めつけちゃいけなかった」

「雑種など所詮はその程度よ。凡俗であるのなら数をこなせ。才能が無いのなら自信をつけよ。お前にくれてやった言葉だ」

「うん。私は、諦めないよ」

記憶を脳裏に焼き付けるように、岸波白野は目を閉ざした。

第12話

混沌の闇の中それはただそうあるべくしてそこにあった。
はるか古の時の枠すら超越した星雲の果て。

エントロピーの増大を逆にたどった先にそれは存在していた。
何の意味も概念もない空間にただ一振り。

故にそれは永劫に孤高であり、不変なるもの。

——原初を語る。元素は混ざり、固まり、万象織りなす星を生む。

白野が目を覚ましたのは、太陽が空に昇りきってからだった。午後
の暖かな日差しが心地よい。起きようとして、気づく。お腹あたりに
ギルガメツシュの腕が回されている。こっそりと抜けようと試みる
も、拘束が強まるばかりで、一向に動けやしない。前に英霊は寝る必
要がないと教えてもらったことがある。あれは覚え違いだろうか。

「起きて、起きて。ギルガメツシュ」

何とか寝返りを打ち、傍らの男を揺り起こそうとする。だが、熟睡
しているのか、今度は足まで加わった。岸波白野は終ぞ諦め、される
がままに二度寝する事にした。最も、その微睡みもまた、直ぐに終わ
るのだが。

「書信をお持ちいたしました」

誰かが扉を叩く音に再び意識が覚醒する。涼やかな女の声とは裏
腹に、傍でのそりと身体を起こしたギルガメツシュは、至極不機嫌そ
うに眉をひそめていた。

「アインツベルンが何用だ？王の午睡を妨げるとは、万死に値するぞ
！」

あ、と思った瞬間にはもう遅かった。止める間もなくギルガメツ
シュは全裸のまま、勢いよく扉を開けた。アインツベルンのメイド2
人を引き連れたセイバーが顔を真っ赤にして立っていた。

「な、な、なっ……!？」

絶句している。しかも自分とギルガメッシュを見比べてる？何だか巻き込まれているようだが、寝ぼけ頭では理解が追いつかない。はて？と小首を傾げる。一方の騎士王といえ、茹でたこのように真っ赤になったり、次の瞬間には紙のように真っ白になったりと忙しい。そしてついにはワナワナと震える指をギルガメッシュへ向け、噛み付かんばかりに吠えた。

「仮にも王を自称するものが、こんなたいげな子供まで慰み者にすると、犬畜生にも劣るわ!!」

慰み者の意味はよくわからないが、取り敢えずギルガメッシュの行動が何か気に障ったらしい。ギルガメッシュもまた困惑気味に首を傾げ、ついでニタニタと人の悪い笑みを浮かべた。

「なんだ、我が至宝の裸体に照れたか？セイバー。何、恥じることはない。貴様のような生娘が私の寵愛に浴したいというのであれば、手慰みに我が寝所へ招いてやろう」

流れるようにセイバーの顎を掴み、ギルガメッシュが言い放つ。相変わらずセイバーは一人で百面相している。どうもギルガメッシュがセイバーをいじめているようにしか見えない。取り敢えず、寝所と聞こえたので、白野はおおずと声をかけた。

「一緒に寝るの気持ち良いよ？裸の付き合いつて言うんだよね」

だから、セイバーもー。そう言いかけて、ボタンと扉は閉ざされた。

そして今岸波白野は再びアインツベルン城を訪れ、アイリスフィールの向かい側で紅茶を啜っている。どうやら手紙の通り、本当にただの茶会の誘いだったようだ。切嗣と呼ばれた男や、やたら鋭い目をした黒服の女性は今日いない。何やら仕事で出払っているらしい。そして円卓を挟んで、左手にはニヒルな笑みを浮かべ余裕綽々のギルガメッシュと、右には今にも噛みつかんばかりのセイバーが座っている。

「昨日はごめんなさいね？ちゃんとしたおもてなしもできなくて」

「ううん。今日はご招待ありがとう」

「切嗣もいつもはああじゃないんだけど、近頃少し気が立っているみたい」

困ったように眉尻を下げ、アイリスフィールは微笑む。子供心ながら、これが良妻というものかと思った。事実、岸波白野はあの衛宮切嗣という男が、そこまで悪人だとは感じられなかった。冷たい人では間違いないが、どこか努めて冷たくあろうという面が感じられた。

「気にしてないよ。ケーキ、美味しいね」

「ふん、この程度の粗末な食べ物で美味などと、貴様の舌は余程鍛錬が足りぬと見た。こちらへ来い。飴をやろう」

横から伸びた腕に、ひよいと身体が持ち上がる。瞬く間に白野は今は現代の服装を身に纏う王の足の間に落ち着いた。所謂、いつものポジションだ。それを見て黙っていたのが、セイバーだった。

「こちらへ来なさい。あの男は獣だ」

そう言っただけの間にか側に来ていたセイバーに抱えられ、今度はセイバーの膝に乗せられる。向かいのギルガメッシュは皮肉気な笑みを浮かべこちらへ腕を伸ばした。

「何だ。白野が気に入ったか？こやつは私の財ゆえくれてやることは出来ん。だが、まあー我に付き従うというのであれば、共に愛でてやっても良いのだぞ？」

「寄るな、変態！」

パシンとギルガメッシュの手を叩き落とし、セイバーは毛を逆立たせた猫のように威嚇する。思わずその頭を撫でながら、精一杯の慰めを口にした。

「大丈夫。ギルガメッシュは痛いことしないし、一緒にいて気持ちがいいんだよ。」

「やはり手を出していたのか、この外道！」

火に油を注いだようだ。ギルガメッシュは再び笑いこけている。何だか今日はやたらと上機嫌だ。今は右横にいるアイリスフィールに両手を握られる。

「ちよつと、良いかしら？」

第13話

1時間後、今度は白野が赤面する番となった。5歳児には早すぎな話だったが、危険な男と2人暮している以上はと、アイリスフィールに男女の違いや生殖について懇切丁寧に教えられた。もちろん、かなり噛み砕き、場合によっては避けた話題もあるが、概ね標準的な保健の授業である。

「くだらん。愛でる財に老若男女など関係あるまい。視野が狭いにも程があるう」

もつとも、ギルガメツシュには何時もの傲岸不遜さを持って、一蹴されてしまったのだが。思い返してみれば、ギルガメツシュと裸で抱き合ったまま同衾したり、一緒に風呂に入ったりと、その所作も含めて多分に男女の親密さが含まれていた気がする。おかげさまで、後ろから抱きしめられただけで、バクバクと心臓が煩い。

それは唐突に訪れた。ガラスの割れるような不快な音が頭の中に木霊する。黄金と青の王は既に武装しており、片方は主の隣に控え、もう片方は少女を抱き寄せている。アインツベルンの結界を破った正体を見定めようと、アイリスフィールが水晶玉を覗き込む。カエル面のおぞましい長身の殺人鬼は、鬱蒼とした森へ子供達を放つ。血生臭い遊戯の始まりだった。

「アイリスフィール！」

「うん。キャスターを倒して、セイバー」

「ギルガメツシュ、ここに残って」

「心得た。その体は我が財ゆえ、傷一つ付けてくれるな。さもなければ、その頭、斬り落としてくれよう」

「分かった。行ってくる」

会話におどろくアイリスフィールを他所に、白野は暗い森へと駆け出した。キャスター…きつとあの悪魔の所業は許すことができない。けれど、前回の交戦から一筋縄ではいかないのも分かっていた。重要なのは、キャスターの持つ魔導書をどうするかだ。

たどり着いた先では、木々は倒れ、周囲に夥しい数の海魔が蠢いていた。逃げ果せた子供が一人セイバーへ抱きつき、キャスターが大仰な動作で何かを言っている。不意に凄まじい悪寒が背中を駆け上り、白野は叫んだ。

「セイバー、避けて！」

祈りも虚しく、海魔がその子の腹を裂いて這い出た。触腕をセイバーに絡めようとしている。なんとも悍ましい光景だ。呆然としたままセイバーは動かない。返り血はセイバーだけでなく、白野にまで降りかかった。吐き気を抑え、アイギスをセイバーの前に展開する。「ギルガメツシュ！」

金色の光が薄暗い森の靄を切り裂く。セイバーを捉えていた一匹が砕け、ついで周囲の海魔たちも藻屑と化してゆく。打ち合わせ通り見通しの良い城壁から、ギルガメツシュが援護射撃をしてくる。だが、海魔の数は減らず、キャスターが悦に入った笑みを浮かべている。正確には、屠った分の海魔が直ぐに再召喚されただけだが。予想通りとは言え、随分とえげつない敵対者であった。

「二日退いて、セイバー！海魔の相手をしちやダメだ！」

周囲を取り囲む数は百か、二百か。我に返って絶妙な剣技で海魔を屠り続けるセイバーに声をかける。セイバーは剣を振るうごとに魔力を消費するが、それではあの男の思う壺だ。

「どういうことですか？白野！」

そう問いかけようとして、再生した眼前の敵にセイバーが飲まれる。なんとか助勢しようと思うも、白野は自らを守る盾を維持するのが精一杯だった。ギルガメツシュが空から掃射するが、あの位置から魔導書を狙撃させるには、キャスターの周囲の使い魔たちが邪魔だった。一度でもこちらがそれに気づいていると知られば、あのずる賢い男は直ぐに撤収するだろう。不利な地形に誘い出すやり方といい、セイバーの精神を摩耗させ物量で押し潰すやり口といい、相手は戦を心得過ぎている。ただの猪武者では歯が立たない。

「おや、一人逃げ遅れがありましたかな？君のように聡い子供は嫌いではないですよ？お嬢さん」

数体の海魔にセイバーを拘束させたまま、キャスターの注意がこちらへ向く。思わず後ずさるも、左右からの2体に挟み打ちに遭う。身体を這う触腕が気持ち悪い。ベトベトの粘液が絡みつき、服を溶かして行く。

「白野！」

セイバーの焦った声がする。身体に顔に絡まる触手の肉を搔き分けた隙間から、キャスターが見える。ギルガメッシュの速射が一時的に海魔を屠るも、予想以上に召喚が早い。幾度引き裂かれても、新たな海魔が露わになった身体に纏わりつく。

「屈辱的でしょう？ 栄えもなければ誉れもない魍魎たちに、押し潰され、窒息して果てるのです！ 英雄にとってこれほどの恥はありますまい！」

ああ、ご安心なさい。そちらのお嬢さんも、後ほどたつぷり可愛がって差し上げますからね

「何をやっている、白野!!」

珍しく動揺を露わにしたギルガメッシュの怒声が聞こえる。指示を出そうとするのに、口の中に押し込まれた触手のせいでえずき、うまく声が出せない。だがギルガメッシュに今の段階で狙撃させるのは得策ではない。あの本が動力源である以上、盾のようにキャスターを取り囲む海魔を一掃しなければ意味がない。しかも、暫くは再生不能に持ち込まなければ。

「情けないぞ、セイバー。この程度の雑兵に手こずるなど、お前らしくもない」

不意に、涼やかな声とともに。赤と黄の二本の槍を携えた槍兵が、膠着した戦場に飛び込んできた。黄色の槍に斬り伏せられた海魔は暫く退き、再び襲ってはこない。天啓が降りた瞬間だった。

第14話

「このデイルムツドを差し置いて、片腕のみのセイバーを討ち果たすことだけは、断じて許さぬ。なおも貴様が引かぬとあらば、これより先は我が槍がセイバーの“左手”に成り代る」

「おのれ…おのれ匹夫めがあ!!」

ヒステリックな叫びをあげるキャスターに脇目も振らず、セイバーとランサーの元へと駆け寄る。爽やかに笑うランサーと、未だ険しい表情を崩さないセイバーの服を軽く引く。

「魔導書を完全に壊さないと、キャスターは倒せない」

「あの無尽蔵の召喚。まさか…!?!」

「そう。キャスターは大したことない。けど、あの本は生きて魔力を飲み込むもの。セイバーがタコを退かして、ランサーが黄色いので突けば少しは。けどタコを餌に直ぐ回復するから、ギルガメッシュに狙撃でトドメを刺してもらおう」

頬についた粘液を拭いながら、岸波白野は淡々と述べた。セイバーが半信半疑の顔を向けてくるが、意外にもランサーが作戦を快諾した。

「なるほどな、フィンヴェルの知見を持った娘よ。君がそう言うなら、そうに違いない。俺は乗ったぞ、セイバー。この度は主より加勢を仕った。手っ取り早く倒せる手があるなら、利用しない道理はない」

「そうか…白野！今ばかりは私もこの剣を貴女に託そう！指示を!!」

英霊二騎の期待を背負い、白野は竦む足で大地を踏みしめ。胸元の鍵を握りしめた。

「セイバー、先鋒でキャスターへの道を切り拓いて。できるだけ遠くへ吹き飛ばす技で。ランサーはキャスターへ近づいたら赤い方で本を傷つけて、直ぐに黄色で本体を攻撃。できるだけ本を払い落とす。魔導書の破壊は、ギルガメッシュに私からお願ひする」

「良いでしょう。ならば風王鉄槌ストライク・エアを使おう。ランサー、風を踏んで走れるか?」

「フツ、造作もない。大将首キャスターは俺が頂いた」

セイバーが風王結界を真名で詠唱する。頭上に振り上げられた不可視の剣は吹き荒ぶ暴風を纏い、その真の威力を惜しむことなく発揮する。真つ直ぐにキャスターへと伸びた風は海魔を退け、濃霧さえ散らして道を作る。荒れ狂う風の後押しを受け、そのままの勢いでキャスターへ肉迫したランサーは、作戦通り赤槍でもって召喚を取り消し、黄槍をもって魔導書を叩き落とし、消えぬ傷をつけて行く。

「ギルガメッシュユー・今!!」

光の矢が間髪入れず飛来し、キャスターの腹と魔道書の核を貫く、その筈だった。

「「白野!」」

予想外に暴走した海魔の1匹が孤立した白野を捉え、黒影の暗殺者が刃を一閃。一瞬の隙にキャスターは再び魔道書を手に霧散し、海魔ごと切り裂かれたチェーンが宙をまった。なんとか掴み取ろうと小さな手が宙を掻くが、掴んだのは光の粒の残像だけだった。背中から落ちる小さな身体を、いつの間にか側に降りた黄金の王が受け止めた。

同刻。冬木市の高級ホテルの向かいの屋上で、衛宮切嗣と助手の久宇舞弥は、その時が来ることを固唾を呑んで待っていた。

「首尾はどうだい? 舞弥」

「計画通り、既に火事による避難誘導が行われております。予測時刻との差異はプラス7分。やや遅れています。問題ないと思われません。」

「爆薬は?」

「あのビル一棟を爆破解体できる量を過不足なく」

「上々だ。ケイネス・エルメロイ・アーチボルト、ソラウ・ヌアザリ・ソフィアリの2名は?」

「赤外線レンズを通してみる限り、2人がいるフロアのみ人間の体温と思わしき反応があります」

「予定時刻をちょうど7分過ぎた。他の階は?」

「クリア。およそ生体と思える熱源は見取れません」

「起爆しよう」

轟音がとどろき、地響きと共にグランドホテルが倒壊する。かつて高級ホテルとして名を馳せ、名だたる客をもてなした威光は最早なく、すべて瓦礫へと化していた。

「切嗣」

「流石にトドメは無理だったようだね。撤収しよう」

「はい」

辛くもキャスターを退いた面々は、アインツベルンの城の中、一堂に会していた。セイバーはアイリスフィールの手当てを受け、岸波白野はいつの間にかギルガメッシュが用意した布で粘液だらけの身体を包まれ、その膝の上に乗せられている。ランサーは壁に背を凭れさせ、佇んでいた。

「感謝します、白野。良い采配でした」

「ハッ、これは我が手ずから育てた財ゆえ、この程度、造作もない。だ」というのにこの体たらく、帰ったら仕置だな」

前半はセイバー、後半は白野に向けられた言葉だ。いつになく厳しい紅玉の瞳に、白野は思わず身震いした。加えて大事な鍵まで取られてしまったのだ。あれはギルガメッシュとの繋がりを強く示すものであり、生まれながら持っていた半身のようなもの。胸にぽっかりと大きな穴が空いたようで心許ない。

「その言い方は余りにも……それに貴方は何故、あの時白野を助けに来なかった!」

「貴様に発言を許した覚えはない。控えよ、雑種。これはあくまで我と私の財の話だ。そら、帰るぞ白野」

ギルガメッシュに手を引かれ、床に降りる。失望させたかなと思うと、つい涙がでそうになって、思わず顔を伏せて堪える。そんな滲んだ視界に鮮やかな赤い影が差した。

「泣いているお嬢さんを放つてはおけないたちでね。どこぞの王かは知らないが、こんな幼気な^{いたいけ}子供を虐めるのは感心できない」

「痴れ言を。なれば塵芥の如く散るか?」

阻んだのはランサーの破魔の槍だった。即座にギルガメツシュが右腕を掲げ、黄金の波紋を顕現させる。二人が自分のせいで争うは何だか嫌だ。

「大丈夫だよ、ランサー。今回はありがとう」

「デイルムツドでいい。君の声は何だか心地良い。その男に嫌気がさしたら、俺個人としてはいつでも歓迎する。あの采配、見事であった」

「貴様にはやらんぞ、ランサー。白野がそこな金ピカロリコンに愛想を尽かしたら、真っ先に我らの門下に下るからな」

頬を伝う涙を拭い、精一杯の笑みを見せる。ギルガメツシュを見れば、興醒めとばかりに宝物庫を閉ざした。庭へ停めてあったヴィマーナに向かう道すがら、振り向く。

「本当にありがとう。あとね、ランサーは早くお家に帰った方がいいよ。今、がら空きでしょ？」

第15話

拠点のスイートルームに戻ると、まずは容赦なくバスタブへ放り込まれた。それも頭から。泡風呂に沈められては引き上げられて、身体を洗われているのか、水責めなのかよく分からない仕打ちを受けた。その癖、風呂上がりに髪を梳かして乾かしてくれる手つきはいつも通り優しい。

「えつと……ギルガメツシユ?」

「仕置をする、と言ったはずだが?もう忘れたとは言わせまい」

バスローブを纏った王様の膝の上に、白野は今全裸で腰を上げ、うつ伏せの状態で拘束されている。そうして、高く振り上げた右手が勢いよくお尻に振り落とされた。これは、もしかしなくても……。

「お尻ぺんぺん、という奴だな。貴様の国ではこれが幼子の躰方だと言うのでな」

「あううっ……ごめんなさい!ごめんなさい!」

容赦なく尻たぶを襲う痛みと、羞恥心で顔が燃えるように熱い。思わず絶叫すると、ギルガメツシユの手がピタリと止まった。

「ほう。謝るか。では、何が悪かったか述べてみよ」

「無茶な作戦でセイバーを傷つけて、キャスターを逃してごめんなさい。それから、ギルガメツシユに貰った大切なかぎっ……いっ!」

再び、容赦なく手が打ち下ろされる。しかも、心なしか先ほどより力が増している。

「やはり何も分かっておらん。剣士だ槍兵だと言う有象無象など元よりどうでも良いわ!あの鍵はまあ我の財ではあるが、取ったところで奴らには扱えぬ代物ゆえ、大事はない!我が言いたいのは、そういうことではない」

涙目になりながら、王の叱咤を拝聴する。振り返って見ることはかなわないが、今頃お尻は動物園の猿のように真っ赤に腫れ上がっているに違いない。不意に、手つきが和らぎ、ギルガメツシユの声が低くなる。

「貴様はなぜあの時一言『来い』と言わなかった。海魔の動きなど見え

ていたというのに、貴様は止めを刺すことを優先した」

ぎゆうつと心臓を掴まれたような錯覚を覚えた。それは、あの場で何が起ころかわからなかったから。サーヴァント兵を動かすは将マスターの務め。最善を尽くすためにも、ギリギリ見極める必要があった。ギルガメッシュだってそれは分かかって居たはずだ。

「……馬鹿者」

覆いかぶさるようにしてギルガメッシュに抱きしめられる。さらに金髪が背中に触れ、なんだかくすぐったい。背中から聞こえた半ば拗ねたような呟きに、漸くその気持ち少し分かった気がした。

「貴様とて我が財と言わなかったか？再び我の前から消え失せるなど、断じて許せん」

「……ごめんなさい。私は勝手にいなくなったりはしないよ」

「フン、分かれば良い。だが、これとそれとは別だ。貴様が忘れぬよう、尻叩きの刑に処す」

先ほどの様子は何処へやら、すっかりいつもの調子で王はニヤニヤと意地悪な笑みを浮かべてこちらを見下ろす。その晩、人知れずスイトルームには男の高笑いと、幼い女兒のすすり泣きが響いたと言う。

「遠坂時臣……何用かね？見ての通り私達は忙しい」

冬木大橋の全身だった古橋の下、月明かりすら差さないそこに、寶石魔法を駆使する男は立っていた。拠点を爆破され、苛立ちを隠しきれないケイネスの問いに、男は鷹揚にステッキを掲げるだけで答える。傍の影より出でた片腕の暗殺者は、黄金の鍵をケイネスに放ると、恭しく一礼をして、どこへとなく消えて行った。

「小娘から盗みを働くのに、相当骨が折れたと見える。だが、約束のものしかと受け取った。解析次第、貴様にも報せるとしよう」

「それは重畳。ところで、君のサーヴァントはキャスターを仕留めきれなかったようだな」

「誰かがコソコソと動き回っていたお陰でね。鍵のためとは言え、随分な真似をしてくれる」

「おや？」機嫌を損ねてしまったようだ。とは言え、ランサーがあの子に情けをかけなければ、こうはならなかったとは思うが」

「フン、虫けら風情の討伐に余計な労力を掛けたくはなかったのな」「折角監督役まで抱え込んだのだ。次はしくじらないでくれ。ではまた、然る時に」

人好きのする笑みを浮かべたまま、男が闇へと溶け込む。全くもって不気味なものだ。一体何処まで監視し、何処まで掌握しているものか。

「ランサー」

「はい、我が主」

「貴様も分かっている通り、次はない」

背筋を凍えさせるような声色でケイネスが言う。純然たる魔術師である彼はプライドが高い。己の矜持を汚されることは、さぞ腹に据えかねているだろう。

「はっ…時に主、あのお方を信用されて居られるのです？」

「貴様には私がそこまで愚昧に見えるかね？一時的に利用しているまじでだ。引き続きあの小娘の身边を洗え。礼装を失ってなお遠坂時臣が執着する理由が必ずあるはずだ」

槍兵は静かに頭を垂れ、了解の意を伝える。その姿が光の粒となつて消え失せるのを見送つてから、ケイネスは婚約者を携え、新たな根城へと向かった。

翌日、あれだけ叩かれた尻も、子供特有の回復力の高さからか、すっかり治っていた。何となくまだ少しヒリヒリする気がするが、大事はない。いつも通りギルガメツシュに朝刊を朗読してもらい、キャスターの動向を示す事件はないか確認する。

「動かないね」

「深手を負わせたのだ。潜伏されても、不自然ではあるまい？」

てつきり手取り早く人を捕食して不足分の魔力を取り込むかと思っただのに、そうではないらしい。椅子の上で膝立ちになり、ギルガメツシュが展開してくれた「盤面」を、覗き込む。

「うーん。それは考えづらいな。色々な人に狙われていても、餌を食べなきゃジリ貧だよ。それに、キャスターは指揮はうまいけど、自分1人で器用なことではできないよ」

「フツ、あの気狂いに手を貸す白痴などいまい」

「手を貸したんじゃない、利用したんだよ。キャスターは確かに頭はおかしいけど、セイバーには強いでしょ？」

目を閉じて、昨日の出来事を回想する。白野の考えを辿り、盤面の駒は自ずと昨夜の位置につく。アインツベルンの森に現れたキャスター、対峙するセイバー。その後方に白野、城壁の上にギルガメツシュ。そして、城内にいたアイリスフィール。

「キャスターを残せば、少しはセイバーが苦勞する。でも、あんまり良い手ではない気がする」

「ハッ、大方我が財に目が眩んだまでよ。王律鍵バザリイルを奪ったところで、我以外に行使できる筈もないというのに、全く無駄なことよ」

「だとしたら、ランサーのマスターがどうしてアサシンに手を貸したかが分からないよ」

小さくため息をついて、アサシンの駒をランサーに寄せる。ランサーは振る舞いからしてすぐく正々堂々としていた。そんな人が子

供でも容赦なく皆殺しにする陣営と手を組んでいるとは、思いたくもない。ギルガメツシユの赤い瞳が言葉の続きを促している。

「どうもちぐはぐなんだ。ランサーが来たタイミング、あれは明らかにセイバーに追い打ちをかけるためだ。仮にギルガメツシユの狙撃があつても、私を捕まえることもできた。けど、ランサーはそうしなかった。じゃあ本当にキャスターを殺すため？ だったら私を放つといてトドメを刺せば良かった。態々様子を見に来ておいて、2回しか会つたことのない子供にそんな親切するかな？」

「随分と子供らしからぬ疑念だ。前にも教えたであろう？ 盤上において未来は読むものではない。俯瞰して観るものだ。正着は常に見える。なれば、魔術師どもの算段も火を見るよりも明らかだ」

俯瞰。大局を常に見よ、とギルガメツシユは言った。もしも、もしも上手いことアサシンが自分を襲つたのをランサーたちが手助けしていたら？ つう、と、背中を冷たいものが伝った。

「引越ししなきゃ。ここはランサーのマスターに張り付かれている。セイバーの動きを見ながら、アサシンと私たち、あとセイバーとキャスターを相討ちさせる気だ」

「フツ、それでこそ我がマスターと言うもの。斯様な事にも気づけないうようなら、手打ちにするとところだったぞ。して、行く宛ては有るのか？」

「分からない。けど、高いところはやめた方が良い。撃ち落とされたくはない」

「王たる我に地上に立たせるなど万死千万だが、まあ、一理はある。偶には穴倉にこもってハサンの真似事をするのも一興だ。今すぐここを出る。疾く仕度せよ」

「うん」

余裕たつぷりなギルガメツシユの表情に、少しホツとする。この頼もしい王様は、きっともう新しい拠点の算段が付いているのだろう。

「こんにちは」

その子に出会つたのは、ほんの偶然だった。

悩んだ挙句、町外れの廃校で、アサシンの拠点である教会のをギリギリ監視できる場所が、白野とギルガメツシユの新しい居所となった。正直こんな廃墟にあの王様が素直に腰を下ろしてくれるとは思わなかったが、存外に二階突き当たりの教室が気に入ったようで、魔改造して使用している。余談だが、ギルガメツシユが最初に提案してきた豪邸は、立地は悪くないものの、相変わらず目立ちすぎるので白野が却下した。

「……こんにちは。私には、あんまり関わらない方がいいよ」

キヤスターやアサシンの動きもなく、各陣営の動向を気にして潜伏するという退屈な日々の中、気晴らしに住宅街近くの公園に来て遊ぶのが、白野にとつてのささやかな楽しみになっていた。勿論、他の魔術師に見つかるリスクはあるのだが、そこはギルガメツシユがうまく取り計らってくれた。そして、いつものように散歩がてらに立ち寄ってみれば、彼女がいたのである。

「何か、辛いことでもあったの?」

そう、声をかけずにはいられなかった。紫がかった紺色の神秘的な色素を持った女の子だ。背格好からして、自分と同年に見える。赤いリボンで髪を留め、膝を抱えてベンチで座るその姿は、まるで全てを拒絶して殻に閉じこもっているように見えて、なんとなく放っておけなかったのだった。

「……」

彼女は答えない。ちらりとこちらへ寄越された視線は、直ぐに逸らされてしまった。

「私は白野。明日また来るからね」

返事は、やはりない。結局お互い一言も発さず、並んで座っているうちに、夕暮れ時になっていた。彼女に手を振って、白野は公園を後にした。

第17話

翌日も、彼女は公園にいた。特別約束をしてくれた訳ではないけど、なんだかとても嬉しい。天まで延びそうな大きな樹。その枝から下げられない2人掛けのブランコの片側に、彼女は揺られていた。そつと腰を下ろして、少し勢いをつける。少しだけ瞠目して、彼女は俯いた。

「こんにちは。今日も風が気持ちいいね」

「……少し、肌寒い」

驚いて、思わず彼女の顔をまじまじと見てしまう。

「……ねえどうして、私に構うの？」

「気になるから。答えたから、名前、教えてよ」

ブランコから飛び降りて、彼女が振り返る。何かを押し殺すかのように、期待するかのように問う彼女に、白野は上ずる声で答えた。自らもブランコから飛び降りて、俯向く彼女の両手を握る。少し無理のある要求だとは思ってた。

「……………桜」

花びらのような儂げな微笑みが一瞬浮かんで、フツと消えた。白野の手を振りほどいて、桜は公園を離れて行く。もう来ないで。そんな声が、風に吸い込まれて消えて行った。

その日教室に戻ると、ギルガメッシュがいつになく上機嫌な様子で玉座に腰掛けていた。そう、玉座である。殺風景な教室に時代錯誤なそれが鎮座する様子は、どう見てもミスマッチだが、ギルガメッシュが満足しているようなので、そこはよしとする。

「ただいま」

「遅かったではないか。そら、どこその大バカ者が仕掛けた酒宴に出るとしよう」

今や見慣れた金色の鎧を身に纏ったまま、ギルガメッシュが指を打ち鳴らすと、優美な飛行船が目の前に現れた。

「しゅえん？」

「酒を酌み交わし、話に花を咲かせる宴だ。それも主催があの大バカ者と来れば、退屈はせんだろうよ」

「宴…パーティーするの?？」

「うむ、まあ、そんなところだ。我が参加すると言うのに貴様を置いておく訳にも行かぬからな、此度は特に許す。我と共に夜遊びだ」

ひよいと子猫のように小脇に抱えられ、飛行船に搭乗する。どうやら、今日も長い夜を迎えるようだ。

ところ変わってアインツベルンの城。すでに到着したライダーは並々と葡萄酒の注がれた樽を中庭のど真ん中に置き、その横にどかつと腰を下ろしている。マスターであるウェイバー・ベルベットというと、その横で目を回して倒れていた。おでこが赤いところを見ると、デコピンでもされたのだろうか。一方セイバーはというと、完全武装でアイリスフィールを背後に庇い、完全に戦闘態勢に入っている。そこへ突然の黄金の船。ひよいと地面に降ろされた岸波白野は、男の裾を引っ張った。長身を屈めたギルガメッシュの耳元でこっそり呟く。

「パーティーって雰囲気じゃないよ、ギルガメッシュ」

「白野!?なぜ貴女がここに!!」

「おう、来たか金ピカ。なあに、今日街で見かけて勧誘しておいたんだ。分かったら貴様も腰を下ろさんかセイバー。酒は良いものだぞ?」

「貴様、一体!？」

「見て分からねぬか?一献交わしに決まっておろう」

腰を下ろしのまま、イスカンドルは樽の蓋を腕力で叩き割った。次いで、どこからか取り出した柄杓で掬い、躊躇いなく口元へ運んだ。どうやら本気で酒を飲みに来たようだが、敵陣のど真ん中でそれをやってのけるとは、どこまでも豪胆な男である。

「言わば『聖杯戦争』ならぬ聖杯問答。そら、小娘。お前も少し試してみるか?」

「それ、美味しいの?」

「やめておけ」

あろう事か子供に柄杓を差し出す男に、セイバーが青筋を立てる。しかし、彼女が立つよりも前に、ライダーこと征服王イスカンドルを止める腕があった。ギルガメッシュが柄杓を奪い取ったのだ。保護者の自覚はあるものだと見直したセイバーだったが、それも次の一言で崩れた。

「あのようなものを口にするなど舌が腐る。見るがいい、そして思い知れ、これが王の酒というものだ」

ギルガメッシュが意気揚々と手を振り上げ、背後に波打つ黄金から、金の盃を取り出す。早速歓声を上げて、イスカンドルが堪らないと言った顔で口をつける。一方セイバーは、ギルガメッシュがふざけて岸波白野に飲ませようと与えた盃を横から取り上げ、一気に干した。そして僅かに顔を綻ばせる。なるほど、これは至高の酒に違いない。

「存分に味わうが良い。これが格の違いというやつだ。して白野、口を開け」

振り返ると、手甲を外した指を酒に浸したギルガメッシュが、人の悪そうな顔で笑っていた。意図を察せないまま口を開くと、酒に浸された二本の指が侵入してきた。芳醇な香りとともに脳の奥からほうと温まる感触がし、加えて口の中で動く指が擦るように動くもので、気づけば舌を絡めて夢中で吸い付いていた。

「ふはあ」

唐突にギルガメッシュが指を引き抜く。なんだか頭がぼうつとする。そして堪らなく良い気分になってきた。これがお酒というもののか。フラフラしながら立ち上がり、頬を染めた白野は気持ち悪いほどの満面の笑みで、セイバーに近づいた。

「せいばあー、せいばあーがんばってるねーいいこーいいこー」

「あつ、あの、白野!?白野!しっかりしろ」

「えへへへへー」

固まったままのセイバーにそろりと腕を回し、そのまま頭を撫でながら、白野は頬ずりを繰り返す。困惑してあたふたと引き剥がそうとするセイバーだったが、当の白野は抱きついたままだ。その様子を、

イスカンドルとギルガメッシュが腹を抱えて笑いながら見つめていた。

一頻り笑終わった面々が、最後に目をつけたのはギルガメツシュだった。筋力Bを誇るサーヴァント2名が、躊躇いなくギルガメツシュの腕と足を押さえ込み、白野に差し出している。因みにウエイバーは天の鎖から解放されたイスカンドルのデコピンを食らって完全に伸びてしまっていた。

「なっ、貴様ら?!おのれ、打ち首にするぞ!!」

「なんでしたらこちらのリボンもお貸ししよう」

完全に出来上がったセイバーからリボンを受け取った小さい悪魔は、まさか矛先が自分に向かうとは思わず、往生際悪くジタバタと暴れるギルガメツシュへ迫る。

「えへへ、ぎるーちよんまげー」

ご満悦と言わんばかりに胸を張る白野の目の前では、解いた金髪をサラサラと風に晒したセイバーと、髭を編まれたままのライダー、それから立てた髪を結わえられ、珍しくげんなりとした表情を見せるギルガメツシュという三王が残された。まさに死屍累々である。

「フッククククク…改めて見ると、ひどっげふっ、惨状ですね、フッフッフッフ」

「いやあ、「全くだ」」

最も被害の少なかったセイバーが腹を抱えて大笑いを始めると、つられたのか、深夜のインツベルン城で笑いの渦が巻き起こった。

「でー、ギルガメツシュ、あなたは一体なんでせいはいを欲するんですー?えらそーにしている割にはー、一週回って興味なさそーですが」
「ふっ、奪うのではない。そもそもにおいて、アレは我の所有物だ、世界の宝物は一つ残らずその起源をわが蔵に遡る。つまり…我のものは我のもの、お前のものも我のものという事だ、フツハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!」

「世界最古の…ジャイアニストめー、これでもくらえー」

もはや完全に呂律の回らなくなったセイバーがギルガメツシュにからみ酒をすると、こちらも無駄な高笑いとともに返す。白野はというと、ギルガメツシュの腕の中ですうすうと気持ちよさそうな寝息

を立てている。答えながら酒を干したギルガメツシユの盃に、セイバーがおぼつかない手つきでドボドボと酒を注ぐ。

「貴様は注ぎ方が雑だな、白野にも劣るぞ」

「ろりくんは黙ってなさい。ゴリラー、おいゴリラー貴様はどうなんっでつすつか!」

「いやあ…まあ」

「またもや叩きつけるようにしてライダーの盃を満たしたセイバーに、ライダーが言い淀む。そして意を決したように宣言した。

「受肉だ」

「は?」

「フツ」

「余は転生したこの世界に一個の命として根を下ろしたい。そして、再びオーケアノスを!」

「ハハハハッ!ゴリラ風情が何を言っている。見果てぬ夢の先は何がある!」

「ほんとうれすよー、そんなものはー王のあり方じゃないれすー」

馬鹿にする2人に、赤ら顔のイスカンドルが思わず顔を顰める。

「ならば貴様の望みはなんだ、言ってみろ!!」

「ふふふ…よくぞきてくれた、わたしはこきよーを救済する。万能のがんぼーきで、ブリテンを滅びの運命から救うのでーす」

「え?よりによって自らが歴史に刻んだ爪痕を否定すると言うのか、貴様は馬鹿か?」

「うるさーい!こちとら剣を預かって故国にしんめーを捧げたんだ、その滅びを悼んで何がわるーい!」

「悪い。途轍もなく悪い。第一王が捧げてどうする?国が民草が王に捧げるのだ。断じてその逆ではありえん」

「何をーぼうくん。やーい暴君」

「暴君であるからこそその英雄ぞ。貴様のように己の治世を悔やむ王など暗君と言うのだ。やーい暗君」

「程度が低いな。我クラスともなれば、黙つても万物が我に捧げるのだぞー!」

「黙れジャイアン!!」

お互い睨み合った両王の舌戦はまだ続く。とは言え、ここまで来ればただの子供の喧嘩も同然だが。

「だいたい人を巻き込んで滅ぶのは武人だけでいいれすー正しい治世と統制で民草守れなくて何が王だ」

「ふんっ正しいの奴隷か：優等生ごっこはさぞかし楽しいんだろうな、セイバー」

「優等生で何が悪い！理想に殉じてこそ王だ！」

「ちがーう！王とはな、誰よりも強欲に誰よりも豪笑し、誰よりも激怒する、清濁なく含めて人の臨界を極めたる者、そうあるからこそ臣下は王を羨望し、王に魅せられる。一人一人の民草の心に我も王たらんと憧憬の火が灯る。第一なあ、貴様は救うだけで導きはしない。欲を見せない、貴様の背を追うものは皆苦しいんだよ気付けよ。で道に迷ったら肝心の王は澄まし顔で小綺麗な理想を追い求める訳だ。貴様は所詮王の偶像に縛られたただの小娘よー」

「そのマケドニアは貴様が連戦しすぎて滅んだがなーあれだけ専制君主で民に嫌われておいて、俺についてこいなどとよく言えまふねーこれぞ暴君て感じれすかー?」

「ほう?やるのか小娘」

「やってやろうか?ゴリラが。マーリン呼ぶぞマーリン」

最高に下らない睨み合いをしている両者を見やり、ギルガメッシュは一人手を叩いて笑っている。

「白野、これ起きんか白野！見ろ！あれが暴君と暗君の典型例だ！面白いぞ！こら、吐くな、私の宝物に吐くな、廁行かんか、こら！」

「ウオゲエエエエエエオエエエエエエ」

「ええい助けるそこな下郎！」

「大丈夫れすかー?すっかりしれくらさい、はくのー、はくのー」

「叩くな馬鹿め、余計酷く吐いておるではないか」

「あー、すまんアインツベルンの、とりあえず水を貸してはくれまいか」

第19話

奇妙な闖入者が現れたのは、そんな時だった。

「あー、平時なら貴様らも一杯飲むかと誘うところだが、これは……まあいい、飲みたければ降りてこい、盃を受け取れば友としよう」

飲み会開催場所もといアインツベルン城中庭を囲う暗殺者たちにまず気づいたのは、酔いどれどもの中で比較的に正気を保っていたイスカンダルだ。とはいえ、ヒゲなどを三つ編みにされ、片手で英雄王を手伝って吐き戻した幼女を介抱している途中なので、全く格好が付いてない。ギルガメッシュは未だしがみついてくる白野の世話で両手が塞がっており、セイバーに至っては完全に出来上がってて無茶を言う始末だ。

「なんだ、アサシン！おい、アツサシーン！貴様ら遅いゾォー！駆けつけ3杯!!!一人当たり3杯れすよおー!!!」

「やめろっ！ハサンに大盤振る舞いする酒などっ……おい白野、いつまで吐いておるか！」

「まあそうケケケチするな！ほれ、誘った覚えはないが混ぜたってもいぞ。この柄杓の酒を飲み干せ。これは貴様らの命と同等よ」

返答はなく、髑髏顔の暗殺者はただ一閃、刃の投擲で柄杓を折った。瞬間、芳醇な香りを漂わせながら、赤い雫が宙を舞った。赤ら顔のウェイバーはいつの間にか警戒しながらイスカンダルの背後に隠れている。

「おいつ、ライダーー！」

「あー、分かっているさ坊主。嬢ちゃんもあの様子だ。早めに済ませるに越したことはない」

「ふっ、手は貸さんぞ。白野、両手を上に上げろ。ほら、バンザイー」「バンザイー」

やれやれと立ち上がったイスカンダルが、武装を整える。その瞳はすでに万国を征服した王のそれだった。ギルガメッシュが応えるように笑い、我関せずと白野の汚れた服を脱がせるが、背には既に終末剣を負っている。セイバーも酒気は抜けないものの、油断なく剣を構

え、黒服の暗殺者たちに相対した。甚だ締めりのない空気ではあるが、ようやく各々が戦の準備を整えた様だ。

「最後に一つ問おう。セイバー、王とは孤高なるや?」

「おうであれば、ここーう以外の、なんだっていうんれす?」

「やはりダメだな。で、あるからこそ、余がここで王のなんたるかを示さねばなるまいて」

高らかに宣言したイスカンドルがその逞しい両腕を広げた途端、敵も味方も荒涼たる平原に立たされていった。巻き起こる砂埃の中、アイリスフィールが思わず白野の背をさすっていた手を止め、感嘆の声をあげた。

「固有結界!」

「見よ、我が無双の軍勢を!」

万を越す大群が鬨を上げ、敬愛する王に付き随う。その傍らにはいくつもの戦場を共に蹂躪した名馬ブケファラスの姿もある。立地上その姿を丸裸にされた髑髏仮面の暗殺者たちは、己が命運を悟ったのか、唯呆然と立ち尽くした。

「肉体は滅び、その魂は英霊として『世界』に召し上げられて、それでもなお余に忠義する伝説の勇者たち。時空を越えて我が召喚に応じる永遠の朋友たち。彼らとの絆こそ我が至宝! 我が王道! イスカンドルたる余が誇る最強宝具——王の軍勢なり!!」

なおも口上は続き、ブケファラスに跨ったイスカンドルが己の臣民に号令をかけた。

「王とはッ——誰よりも鮮烈に生き、諸人を魅せる姿を指す言葉! すべての勇者の羨望を束ね、その道標として立つ者こそが、王。故に——王は孤高にあらず。その偉志は、すべての臣民の志の総算たるが故に!」

「二然りッ! 然りッ! 然りッ!!」

腰に配した宝剣を抜き出し、切っ先を敵陣へ指す。雄叫びと共に、イスカンドルを首魁とした軍勢が一つの生き物のように暗殺者たちを呑み込んだ。呆然とその光景を見つめていたセイバーは、王格の違いにただ慄くばかりであったが、やがて意を決して武装すると、千鳥

「興が削がれた。再びそなたら雑種と雁首揃えて酒を酌み交わす機会もないであろう」

「おっとといきやがれれすよー」

「セイバーっ！」

引き止めるイスカンダルに振り向かず、ギルガメツシユは黄金の飛行船に乗り込む。その背中にセイバーが盛大に野次を飛ばし、アイリスフィールが窘めるのを聴きながら、一筋の光を残して、二人は去っていった。

第20話

時を同じくして、バツリイル王律剣を研究していた在りし日の神童にして、天才学者ケイネス・アーチボルトに激震が走った。急ごしらえの工房で、ヴォールメン・ハイドラグラム月 靈 髓 液に囲ませた黄金の生きる鍵にあらゆる測定、対攻性物質の実験を行ってきたが、悉く無反応だったこの鍵が、いまこの瞬間、唐突に光の粒となって掻き消えたのであった。手元に中継された、ランサーが覗き見ていた光景と繋ぎ合わせ、非凡なる頭脳が一つの恐ろしい結果を叩き出す。

「いや、まさか…それでは、あの娘はもう…しかし、そうすれば全ての辻褄は合う…あの契約もまた意味を…」

神経質そうな細眉を顰め、こめかみに青筋が浮く。恐怖と共に、激しい怒りが胸中を渦巻く。謀られた。残念ながら己が陣営は現時点で限りなく「詰み」に近い。神代の宝具に対する興味など、己れを釣り上げる餌にすぎん。狙いは恐らく…

「遠坂、時臣い…」

ギリギリと、噛みしめる様にその名が絞り出された。初手で脱落した平凡極まりない役立たずが、この様な策略家だったとは。何より視られてしまった。あの娘の勘の良さには驚くばかりだ。無詠唱で展開された翼の正体は大凡検討がつく。依り代がなければ、アーチャーが間髪入れず打ち込んだ光の矢はこの身を木っ端微塵にしていただろう。生まれて初めて経験した大きな挫折と、薄汚いネズミの様に追い詰められる無様さに、当第一の才子は思わずヒステリックな声を上げた。

「ランサー…ランサーはいるか!」

「ランサー」

音も無く顕現した英霊に、八つ当たりをしたくなるのを、辛うじて堪え、ケイネス・アーチボルトは椅子に沈み込んだ。頭脳労働は己れ一人で十分と高を括るべきではなかった。従順さが取り柄の脳筋サーヴァントと、そのサーヴァントにうつつを抜かす婚約者がいては、直ぐにも腹背から刺される。加えてかの王の秘密を垣間見てし

まっでは…

「ソラウを、ソラウを英国へ戻せ」

「はっ…？」

「聞こえなかったか、魔力回路は我々の間につなぎ直す。貴様の存在意義を賭けてでも、ソラウだけは無事に本国に帰す。彼女の記憶は私が全て消す。明後日には聖杯のことも私のことも忘れて自宅で寛いでいるだろう。飛行機の手配は直ぐできる。貴様は単独行動ができるであろう？運が良ければ再び会う確率もゼロではない。みすみす若い命を散らすよりは…」

「主、主殿っ…一体何が…」

回転の速すぎる頭脳を有するため、ケイネスの話はしばしば飛躍しがちだ。焦りからまくし立ててしまったが、吐き出したから少し冷静になったケイネスは、徐に口を開いた。

「紅茶を淹れる。貴様が手ずからそれをソラウに飲ませて来い。業腹だが、わたしよりも貴様の方の言うことをアレは聞く。丸2日は決して目が覚めない薬だ。その上、物理的・神秘的な攻撃をレジストし、対魔力が相当高い時計塔の精鋭にすら、外観をただの荷物と勘違いさせる代物だ。念には念を入れて、脱出不能時の備えとして持ってきた奥の手であったが、この際出し惜しみはできん。詳細は貴様がその任を完遂した際に説明しよう」

「はっ！」

忠僕は躊躇いつつも、主人の求めに応じた。

「やあ、久し振りだね」

栗毛の男が親しげな口調で葡萄酒を口に運ぶ。向かいに腰を下ろした紳士の表情は、教会地下の暗がりにも紛れ、伺うことができない。だが普段の優雅な所作とは似つかわしくない、大きな笑い声が、その男が頗る上機嫌であることを物語っていた。

「何もかも君のお陰だよ、フラウロス。これで、結果は確定した」

「何も分かりきったことを調べさせることは無かっただろう。君も人が悪い」

「重要なのはそうであろう蓋然性では無く、そうであることを確実に立証することだよ。英雄王の敵意はアーチボルトに向けられた。これでも私もようやく一つ駒を進められそうだ」

「やれやれ。お役に立てるのならは何よりだが、紙一重でもあったね。あと一歩で滅せられるかと思っただよ。しかし君の娘まで使つてよかつたのかな？流石に非人道的過ぎるきらいもあるが…」

糸目を弓なりに曲げて、栗毛の男は緑のコートを合わせた。果たして今話している相手はどの「彼」だろうと思案しながら、赤服の紳士は愛弟子に報酬を用意させる。

「魔術師として合理的な判断をしたまでだ、あの子を預けたその時から、私のスタンスは何一つ変わらない。そら、報酬を渡そう。学友とは言え、ここまでこき使つておいて何も無いのは、遠坂の名折れだからね」

「ほう…これはこれは」

渡された書類と、クリスタルのケースに入ったそれを見つめて、男は初めて目を見開いた。

「素晴らしい！これは素晴らしい！」

「回収できたのはほんの一部だけだね、アーチボルトが完璧なレプリカを仕上げてくれた。どうするかは君に任せるよ。これで貸し借りは無しだ」

「いやあ、本当に想定外の贈り物だよ。感謝する。では、また何れかの機会に」

「ああ、また。綺礼、送って行きなさい」

「はい」

教会の外では既に空が白み始めていた。扉の前で緑の男は神父服の青年に振り向く。

「そろそろ認めてしまつてはどうだい？君の猿芝居は正直見てもどかしいよ」

「はて、何の事か」

「まあ良い、もう二度と会うことはないし、忠告だ。拒んでも仕方のないものは受け入れるべきだろう。君はそういう人間で、ヒトとは少し

変わった見方をしているだけだ」

僅かにも表情崩す事のない青年に、男は可愛げのないと一人呟き、懐から先ほどのクリスタルケースを取り出した。

「自分で使うつもりだったが、君に差し上げよう。僕なんかよりよっぽど有効活用してくれそうだしね。では」

黒鍵を密かに構えた綺礼に無警戒に背を向けたまま、男はのそりと去って行く。渡されたケースに浮かぶ神秘の残滓を眺め、青年は眩しそうに目を細めた。

「問わねばなるまい。この、答えを」

「最近、あまり来ないんだね」

ブランコに腰をかけて、白野は傍の少女に聞く。おずおずと顔を伏せ、桜はゆっくりとブランコを揺らした。

「うん。お爺様が…ううん、やっぱり、何でもないよ」

「そっか」

沈痛な面持ちにそれ以上尋ねることもできず、白野もまた、桜に合わせてブランコを揺らす。微かな桜の眩きが、風に乗って白野に届く。

「……空は、どんな形？」

「……空は、丸いよ。ねえ、桜。痛い？」

「痛いのは、慣れるもの」

「……………心は、慣れないよ」

初めて、二人の視線が真っ直ぐ交わされる。蕩けそうな蜂蜜色の中に、歪んだアメジストの瞳が映し出される。桜は愛しい我が家を飛び出して、初めて心から涙を流した。自分に抱きつき、噛み殺したように嗚咽を漏らす桜の頭を、白野はいつまでも撫でてやった。

間桐雁夜は戸惑っていた。宿敵と定めた男、遠坂時臣は既に聖杯戦争を脱落しており、教会の保護を受けているため手も足も出せない。庇護すべき対象の桜もまた、別の子供に癒しを見出して全く己の出る幕はない。今に自分がすべきことは、キヤスターを打ち倒して新たな令呪を報酬にもらうことか、それともこの隙に他の陣営の脱落を図ることか。何より、半ば怪物と化した父、臓硯が漏らした一言が気になった。

「此度の聖杯には既に全く違う次元の思惑が絡んでおる。かっかつかつ、こちらとて仕込みに忙しいと言うのに、全くのう」

癪ではあるが、こと魔術やら神秘やらについて、あの老怪の言うこ

とは当たる。バーサーカーは相変わらず意思疎通が困難だし、差し当たりは、桜に接触してきている子供に張り付くか……。

「桜が消えよったわい。ふん、小娘どもが何を考えようと、無駄だと言ううになあ。雁夜、桜を連れ戻してくるがよい」

老怪によつて桜失踪の知らせがもたらされたのは、キャスター討伐指令が下つて間も無くのことであつた。

「何故拾つてきた？」

泣き疲れた桜を説き伏せ、何とかそつと拠点の廃校に戻るなり、腕を組んだ我らが王がこの上ない洗面をもつて出迎えてくれた。下手な言い訳はやめたほうがいいと思ひ、反射的に桜を背後に隠して白野はいつそ堂々と宣つた。

「放つて置けなかつた」

「ハッ！ 貴様ごときハサンが業を背負うだと？ 何たる思い上がりだ！ 己に降りかかる火の粉も払える哀れな雑種であるからして！ 第一、——」

ここで、蛇のような鋭い眼差しが桜に向けられる。射殺さんばかりのそれに、思わず桜が白野の袖を握りしめる。興味なさげに目を細め、黄金の王は幼子に到底向けてはならない暴言を吐いた。

「貴様は意思のない人形か？ それとも壊れ果てた玩具か？ 何れにせよ、今のうちに死んで置け、娘よ。馴染んでしまえば、死ぬことも出来なくなるぞ」

「なっ——」

白野は思わず絶句して唇を戦慄わななかせる。振り返れば、驚愕のうちにアメジストの瞳を見開き、桜が一步、二歩と後ずさつた。何とか制止しようとした手が空を切る。見る見るうちに桜の小さな背中が遠ざかり、薄暗い廊下に紛れた。追いかけてやうとする白野の首根っこを、ギルガメッシュが掴む。

「まあ、待て。あれは介錯してやったほうがまだ良いと言うもの。人形が欲しくば幾らでも代わりを用意する故、諦めるが——」

「桜は諦めない！ 手を離さないって決めたもの！ 絶対に、助ける」

「ほう。我の言うことはが聞けぬと言うか？無礼な。その首、落としてくれようか？」

初めて向けられる敵意に思わず身が竦む。今までの体験と比にならないほどの重圧が小さな体を襲う。刃を直接首に当てられるかの冷気を、震える足を叱咤して跳ね除け、白野はそれでも精一杯抗った。「放っておいて！紫電纏いし天翼の盾!!」

無意識であろう、己に授けられた唯一の権能を解放し、白野の怒りに反応した雷が弾けた。振り返る事なく桜を追いかける姿に、頬を斬られた王は唇を歪ませ、燃えるような激情を瞳に宿す。

「なかなかどうして、良い顔をしてくれる」

「桜――！桜――！」

どれだけ歩いただろうか。季節外れの大雨が岸波白野の小さな体から体温を奪う。何故桜にここまで執着するか、正直分からない。けれど、体の奥から溢れた感情が、何処か遠くへ忘れられた記憶が、見捨ててはならないと、助けろと叫んでいる。その正体は分からないけれど、白野は諦めるわけにはいかなかった。諦められるはずもなかった。

熱で頭がぼうつとする。大丈夫だ。大丈夫。足はまだ辛うじて動く。くぐもつた嗚咽に紛れていたが、あの時確かに桜は、彼女は、自らの意思で選んだのだ。もう戻りたくない、そう言った。例えばギルガメッシュが何と言おうと、連れ戻さなくては。

視界は既に朦朧としている。先の見えない雨のせいで、形も音もよく分からない。それでも白野は止まらなかった。ここで立ち止まるわけには行かないのだ。

――はくの。

――せんぱい。

――センパイ

何かに導かれるようにして、大きな邸宅の外縁を辿る。桜にしては少し大人びた声色、とも思う。けれど、間違いない。彼女は、大事な――。

第22話

ーギルガメツシュ!

喧嘩別れしたと言うのに、まさか来てくれるとは思わなかった。平時であれば艶やかに立てられている金髪が、止めどなく降り注ぐ雨に打たれ、たつぷりの雫を下げて顔を覆っている。怒っているのだろうか。それとも呆れているのだろうか。表情が読めない。

「何を呆けている！我われに刃向かってまで通したい我であれば、さつさと済ませて来るがいい！」

叱咤を受けて、急速に体温が戻った気がした。胸に熱いものが込み上げる。反抗した己に対して、ギルガメツシュは意思を貫けと後押ししてくれた。なら、やる事は一つだけだ。一度だけ振り返ってから、白野は桜を連れ去ったパーカーの男を探すべく邸内へ侵入した。

残された男たちは湖面のように風いでいた。起源の水を踏す双剣を下げた黄金の王。獣の瘴気を纏った漆黒の騎士。果たして先に動いたのはどちらか。雨粒が互いの眼前から、爪先まで落ちぬ間に、すでに剣戟は振るわれていた。互いに肉薄し、激しい鏝迫り合いの二元、本来大雨の中で灯されるはずのない火花が散る。

語る事は何一つない。白野の見識通りあの黒い獣の特質は恐らく手にしたものの宝具への変質。投擲すれば圧倒的不利な上、バーサーカーの特質として、ステータスは筋力、耐久、敏捷のいずれもギルガメツシュより一段階以上高いと観測される。何よりギルガメツシュは王であって戦士ではない。例え自らの伝説の中で怪物を屠った英雄としての側面があっても、決して戦闘に特化しているわけではないのだ。しかるに、バーサーカーに白兵戦を挑むのは無謀の極みと思われた。

だが、そこにこそギルガメツシュの思惑はあった。己の財を汚す敵と認めたと以上、かの王に慢心は一片もない。終末剣エンキはナピュシュティムの大波を呼ぶ神造兵器。撃ち合いにおける威力はかの高名なブリテンの聖剣にも引けを取らない。高速で振るわれるそれに、必然と

た体勢を立て直した狂戦士は、すでにこちらに掴みかからんと肉薄して来ていた。腰を沈め、相手の突進の勢いを利用して、フルフェイスマイルに覆われた頭を半ば抱えるようにして掴み、大地に沈める。反撃を許すより早く顔面への踏みつけ。通常人ならば戦意を失う所だが、理性を失った戦士に効くはずもなく、再度距離を取る。

間違いない。明らかに反応が鈍っている。天を仰ぎ、黒の騎士が吠える。その声に呼応して魔力反応が一瞬だけ膨れ上がる。殺意とともに向けられた赤い眼差しを物ともせず、渾身の正拳突きがバーサーカーの腹に吸い込まれ、そしてー
「チイツ、逃げられたか」

忌々しげに空を切った拳を戻し、己の血に染まった口元を拭う。霊体化することで最後の一撃を免れたバーサーカーの魔力反応はすではない。黄金の王は、悠然とした足取りでマスターの元へと向かった。

間桐雁夜は生家である洋館内を突き進んでいた。臓硯は桜を連れ戻せば、あの非人道的な調練は加減すると言っていた。あの老怪から珍しく言質を取れたのだ。そこに乗らない訳には行かない。真つ向勝負では、怪物じみた老魔術師に、最初から叶う訳は無いのだから。あの女の子を出来れば巻き込みたくはなかったが、子供とは言え聖杯戦争のマスターだ。ここは早めに振り切って諦めてもらうのが仏心だろう。願わくば、このまま諦めて無事帰ってくれば……。

「ゲホッ、ゲホッ……！」

急激に力が失われ、半身に埋め込まれた虫がガチガチと顎を鳴らす。供給できる魔力が底を尽き、刻印虫が生身を分解し始めたようだ。思わず廊下に崩れ落ち、口元を覆う。咳とともに吐き出された血糊を拭う。死期が近い。限りある時間の中で、桜ちゃんを助けなければ。

「ー桜ッー！」

「はくの……」

ポツリと、今まで無反応だった桜が、彼女の名前を呟く。傍に伏す

雁夜には目もくれず、追いついた岸波白野の方へ進もうとする細い足首を思わず掴む。滑稽すぎて笑いがこみ上げる。助けるどころか、これではまるでこちらが悪役では無いか。葵さん…桜ちゃん…どうして君達は。雁夜の意識はここで闇に飲まれた。

第23話

「雁夜おじさん……」

力を失った手の平から足を引き抜く。紺色のワンストラップシューズが片足だけ脱げた。振り向き、ごめんなさい、と呟いて、桜は両手を広げた白野の懐に飛び込んだ。

「行こう。よく頑張ったね、桜」

「うん…うん！」

ボロボロになりながら、抱きしめ返してくれる白野に、止めどなく涙が溢れる。言葉がつかえてうまく話せない。ずっと一人で耐えて来た寂しさや、それを分かってもらえた喜びや、今までの仕打ちへの悲しみやらがぐちやくちやに混ざり合って、桜は暫くされるがままに白野に体を預けた。

「カツカツカツ、小童どもがなかなかやるようじゃのう。じゃが、詰めが甘い、甘い」

「おじい、さま……」

反射的に桜を背後に庇い、神の盾を起動しようとする白野に、老怪は微塵の動揺も見せず、影から滲み出るように、その姿を現した。死人のように真っ白な肌を持った老翁である。古木の皮のように年期的に入った皺が深く刻まれ、毛髪はおろか、体毛の一本たりとも残っていない。腰を曲げているせいも、白野と変わらぬほどの矮躯の癖して、目だけは爛々と不気味に光っている。桜は祖父と言ったが、そうは思えないどこか人間離れをしている形相だ。

「何をやる気なの？」

「おお、怖い怖い。王が隠そうとする獅子の子とくれば、さて、どうしたものか。しかし、この器、逃すには惜しいというもの」

警戒心を露わにする白野に、臓硯はというと、当たつてのんびりした調子で一人ごちる。片手についた杖で二度床を叩くと、臓硯の影がうぞうぞと蠢く。濃い闇が塗りつぶすように白野たちへと伸びる。一つの生き物のようなそれは、無数の虫の集合体だった。汚らしい粘液で糸を引きながら、わさわさと短い足を動かしながら這い寄る。

「桜、立って！」

あまりの悍ましさに腰を抜かす桜を引き起こし、白野は駆け出す。本能が叫ぶ。あれに捕まっては最後だ。あれは人の血肉を食み、人の魂を啜るもの。ギルガメッシュの魔力反応が近い。合流するまで幾ばく、令呪で呼んでしまう事も視野に動かねばならない。ただ、あの老人がギルガメッシュがいることを見越して罟を仕掛けていたとすれば、ここで呼ぶのは思う壺だ。

ぐちゃぐちゃと思考がまとまらない。幾度となく盤面を予想するのではなく、俯瞰しろと言われたが、この事態は彼女の想定を遥かに上回る敗走となった。事実間桐の魔術の本懐は「吸収」であり、臓硯が使役する虫はいずれも人を分解し魔力を回収する特質を持つ。接触すればするほど、魔術師の使える魔力が目減りするため、魔力を放出しそれを盾の宝具として使う白野とは非常に相性の悪い相手と言える。

肩で息を吐きながら、幼い少女2人は屋敷の奥へと進む。そう言った防御魔術なのか、方向感覚があやふやで、何処が外につながっているかなど、てんで分からない。そして夥しい数の虫たち。白野は悟る。この屋敷は外敵を防ぐよりも、外敵を閉じ込めて逃がさないことに特化している。この屋敷自体が、あの怪物の大きな胃袋であるのだ。

「ううっ」

「桜ー！」

白野に体格の劣る桜が再び躓く。残った方の靴も、ストラップがおかしくなって脱ぎかけている。このままでは歩く事もままならないため、何とか靴を脱がせようと四苦八苦するが、手が震えてままならない。

「私を、置いて、逃げて」

「何、言ってる…」

途切れ途切れに言う桜に、白野は狼狽える。確かに一人であれば逃げられる確率が上がる。だが、ここでまた手を離すのか？また、喪うのか？ぐつと歯を食いしばる。虫の群れは既に間近まで迫っていた。

内側から、自分ではない誰かが何かを叫ぶ。

「嫌だっ!!」

困憊している割には、やけに大きな声が長い回廊にこだまする。庇うように桜を抱きしめ、白野は天翼アイギスの盾を展開した。

「貴様、白野に何をした?」

黄金の鎧を鳴らしながら、ギルガメツシユは回廊の奥に佇む老人に問う。ブツクサと何かをつぶやいていた老怪は、自らの影に杖をついて、のっそりと振り返った。

「太古の王か。カカカカツ、雑兵との戯れに随分と時間を掛けたように思える」

「ふんっ」

極めて密度の高い魔力の塊が、光の帯と為して臓硯の間近を通り、そしてその空間をそのまま抉り取った。抵抗する間も無く黒い虫達が塵芥と化し、耳障りな金切り声をあげる。不愉快そうに片手を目の上に翳して、臓硯は目を細めた。口角は、厭らしくつり上がったままだ。

「おお、一撃で儂の虫を半数は持って行きよって…じゃが、生憎とあの小娘を飲み込んだのは儂の虫ではない。あれを見よ」

枯れ枝のような指が指す先、一つの生き物としてうねる虫の群れの合間から、光の差さない赤い瞳が見え隠れする。憎悪の欠片もなく、ただそこにいるだけで、吐き気を催すような化け物のそれが、黄金の王を捉える。直後、虫の壁を突き破って、黒い帯がギルガメツシユに巻き付いた。

「ハッハハハハハハハハハ! 何たる道化! よもや自ら作り上げた人形に食い滅ぼされんようとしているとはなっ! あの空虚な眼を見よ! 既にあるは貴様の御せぬ悪鬼妖異の類と見た!」

カチリと指を鳴らし、天の鎖が纏わりつく帯を寸断する。触れた箇所はそのまま侵食され、消え失せていた。

「だが我おれを襲うなど万死に値する! 貴様の外法な飼い主の前で、処断してくれよう!」

「もう一振りの伝承であればやすやすと片が付くと言うのに何故わざわざ弓兵に徹する？それとも今は抜けんか？……カツカツカツ！見えたと英雄王。無比の英霊も落ちたことだ。貴様、あの娘に何をしたい？え？」

「虫ケラには関わりのない事だ。手が滑ってしまったではないか」

幾星雲の光を集めた光が生の妄執に取り憑かれた老人を貫き、虫の大群が殆ど消え失せる。閉ざされた帯に隠れていた怪物が、深淵より唸り声を上げた。

第24話

「あ、あああああああああああああああああああああ
あっ!!」

ギルガメツシユの腰ほどしか身長が届かない子供が、この世のものとは思えない声で叫ぶ。悲鳴よりも咆哮に近いそれと共に、桜の背後から触手の様に帯が伸び、ギルガメツシユを捕食さんとしている。濃紺の髪には一房白髪が混じり、アメジストの瞳は双方禍々しい赤に染まっている。そしてその腕は、気を失った岸波白野を抱き抱えたままだ。

「我を喰らうか？それとも腕の中のそれを餌にするつもりか？人形の分際で貪欲よな。だがよしておけ。腹を下すだけでは済むまい？」

黒騎士との戦いの跡もそのままに、同じく真紅を湛えた王の双眸が少女のそれとかち合う。全てを見透かされるようなそれに、少女はたじろぎ、急所を突かれたように影を荒れ狂わせる。ひらりひらりと乱暴すぎる攻勢を躲し、黄金の王は終末の弓に矢をつがえる。

「やれ、吸収などと言うのも難儀なものだ。これでは人形ひとがたと言うよりは獣そのものよな。あの小賢しい杉の番人の方が幾分かマシか。業腹だが、こちらにも搦め手を使わざるを得ない」

少女から十歩先に後退し、黄金の王は静止した。身を削る触手を避けようともせず、ただ輝く弦をギリギリと引きしぼる。

――来たれ

――深エき水エの王グの家ラより

――来たれ

――終エ末ンの呼キび声キを冠キすもの

――来たれ

――ナピユシユティム

ひととき眩い黄金の矢が、憎しみを向ける小さな獣の眉間を貫く。途端、暗澹たる屋敷の内部に、目を焼くような輝く光が満ちた。

ふわふわと暖かい光の中、岸波白野は漂っていた。触れることので

きない波は羊水のように、大海のように優しく白野を抱きかかえている。悲しい獣の叫びが聞こえる。ひどく懐かしいそれは、なぜかよく見知ったもう一人の少女を思わせた。

立ち上がり、歩く。上も下も右も左も分らない空間だが、進むことはできた。帰らなきや。ここでの白野は空虚である。器の中身が殆どなくなってしまっている。辛うじて視界の端をノイズのように走る金色の光がなければ、自我を構築することすらできなかっただろう。優しい世界で、ただ分解され、なくなってしまうても構わないと言ふ気もした。でもそうしたらきつと彼の人もあの子も、とてもとても悲しむだろう。それだけはわかった。

自然と足取りが早くなる。力を振り絞り、走る。焦がれるように、光が導く方へと、もがくように進む。少し風景が変わる。桜が黒い靄の中、胎児のように丸まっている。名前を呼んでも応えない。声が出ないようだ。触れようとすれば遠ざかる。それは嫌だ。

気が付けば、ギリギリと弓を引いていた。初めての動作なのに、とても指に馴染む。何もつがえてない空の弦だが、なぜか確信があった。これは必ず当たる。かつて世界を呑み干したという大水の名を呼ぶ。呼応する声色に、矢は真つ直ぐに放たれた。

闇が爆ぜる。弓を下ろした黄金の王はただ静観する。半ば怪物と化した少女の触手は寸断され、ポカリと開いた胸の穴から、真つ赤な血と身のうちに巣食った蟲たちが溢れ出す。少し離れたところに、弾みで手を離して無造作に投げ出された白野が横たわっている。

アレガホシイ、イヤだ、ウバワナイデ：ホシイ、ホシイ、ホシイ、ホシイ、ホシイ、ワタシノワタシノワタシノワタシノワタシノワタシノワタシノワタシノワタシノ……

「カハッ」

血を吐きながら、四つん這いで進む。だって、闇の中でさしたたった一条の光だもの。咲いてしまった花に待つのが凋落ばかりだといふのであれば、せめて。視界が曖昧模糊になって行く。心を塗りつぶす好きという感情と、憎しみという感情がドロドロに溶け合って、桜

の幼い心を占拠する。ただ執念だけを持って桜は未だ眠る白野の方へ進む。

足元から解放された虫たちが群がる。血糊が真紅の絨毯にタールのように真つ黒な紋様を描く。蟲たちと絨毯のシミと、暗い照明が作り出す濃い影とが、矮躯の老人を再び象る。何かを唱えながら、桜の肉を血を取り込まんと蟲たちが蠢く。あつという間に視界は黒で塗りつぶされ、激しい痛みが身体中を貫いた。

『桜、桜……よく頑張ったね』

先程かけられた白野の柔らかな声色が木霊する。あの大雨の中、白野は駆けつけてくれた。魔力を使い果たし、最後まで自分を守ろうとして。ぼんやりと、白馬の王子様のようにだと桜は思った。けれど結局誰も桜をここから救い出してはくれないのだ。心が挫けそうだ。

『大丈夫、桜は、私が守るよ』

違う、ダメ。白野が桜を守りたかったように、桜だって白野を守りたかった。流されるままに蟲に調練されるのも、諦めるのももうイヤだ。どうせもう終わるんだ。白野を、白野をこんな場所に残したくない。その為なら、何だってできる。

桜の身体を喰らいながら、新たな餌に意地汚くありつこうとする蟲たちを、一層暗い影の帯が捉える。開花しつつある杯に口をつけようとしていた老人は、虚を衝かれたように目を見開いた。

「馬鹿な……その状態で動けるはずが……!」

「ぬかったな、老怪。道化は道化らしく喰われておけ」

ユス…ティーツア、私…は……。

果たして末期の声を聞いたものは居ただろうか。宿主の胸を貫かれ、否応無しに外界へと姿を見表した臓硯の本体が、触手の抱擁を受け消失する。ついで蟲の魔力と血肉を喰らい、自らの糧とした桜が、糸が切れた人形のように倒れ伏した。2人の少女を肩に担ぎ、黄金の王はきびすを返す。

「フツ、来たくば勝手について来るがよい、狂犬」

事絶えた主人には目もくれず、幽鬼のように佇む黒騎士が、最後の英雄王に続いた。